

4. 宮城県栗原市・宮崎県小林市シンポジウム関連資料

(1) 宮城県栗原市

1. 栗原市シンポジウム議事録

第1部:基調講演

早稲田大学教育・総合科学学術院 宮口侗迪教授

(司会)

本日はお忙しいところ、栗原市観光産業作りシンポジウムにご参加いただきありがとうございます。私は本日の司会を務めます栗原市産業経済部田園観光課の浅沼と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日のシンポジウムは、国土交通省主催事業地域活性化への理解醸成をテーマに基調講演は、ワークショップを通じて栗原市ならではの付加価値を創造し、地域住民の交流促進と地域づくりで地域を活性化していく方法や仕組み作りを考えることを目的として開催するものです。

それでは開会にあたりまして、主催である国土交通省国土政策局地方振興課、上森 康幹企画専門官に挨拶をお願いいたします。

(国土交通省 上森企画専門官)

みなさんこんにちは。ただいま紹介いただきました国土交通省地方振興課の上森と申します。よろしくお願いいたします。本日は当シンポジウムに足をお運びいただきありがとうございます。国土交通省は、道路、河川、公園、ダムといった社会資本の整備を行っておりますが、それに加え、地域間の交流・連携、地域資源の発掘など、いわゆる地域づくり活動に対しても支援を行っているところです。地域づくりの活動を行っている団体も多くございますが、地域づくり活動を行っている団体はかなり盛り上がっているものの、必ずしも周りに広がらないという課題等があるとの指摘もござい



いております。

今日はこの後の宮口先生のご講演に始まりまして、事例発表、ワークショップなど、盛りだくさんのメニューがございますが、シンポジウムが終わるときには、私も含めて参加者皆さんの地域活性化に対する理解が少しでも深まればと思っております。

以上簡単ですが、挨拶とさせていただきます。

(司会)

続きまして、佐藤勇栗原市長が挨拶を申し上げます。

(佐藤勇 栗原市長)

皆さん、ご苦労様です。お寒い中お越しいただき感謝申し上げます。ここに国土交通省様のご配慮によって、観光産業作りシンポジウムを開催できることは大変喜ばしいことです。実は昨日、冷沢橋の落成の渡り初めがありました。雪の降る寒い中、神技が執り行われまして、皆さんで歩きました。渡り初めをやりました。それは耕英地区の方々にとりましては大変生活に必要な道ができたんだと、あのふっとんだ 3003 キロが、今度は山沿いに間違いのない道路ができた、そういう思いの中で、耕英地区の喜び、また栗原市にとっても観光の新たなスタートだ、それと同時に 3 年 6 か月前の市の大きな事業がこれで完結したんだと。みなさん、よく見ていてください、栗駒山は道と緑と山の再生にむけて大変な努力を国・県がやっています。



また、東日本大震災という大変な地震がありました。しかし栗原市は幸いにも、人の命は亡くならなかった。地域の防災意識の高まりがこれからも皆さん方の団結できっとなされることと思います。

大変な年でしたが、いろんな形で被害に遭われた方々に改めてお見舞いを申し上げながら、さらにこれから頑張っていかなければならないという思いであります。その中で、我々は、表屋弥生さんをお願いをして、なくなられる直前まで栗原のことを思って頂いて、まさに栗原刷新に尽力していただきました。みなさんご存じだと思います。師と仰ぐ宮口先生に来て頂いてお話を聞くこともまた大切なことだと思いますが、地道な努力をされた地域の皆さん、刷新団体また NPO の皆さん方に改めて感謝を申し上げながら、着実に一歩ずつ歩いていくことを願ってやみません。特に今年はネットワークにらいんができました。あのらいん作りで苦労されたと思うのですが、うまく行ったのもうまくいかなかったものも

あり、私は第一歩だと思います。来年も再来年も、栗原市は栗原にしかないものをここで磨き、開発に努めていくという基本的な姿勢のもとに、頑張っていかなければならないと改めて感じています。

昨日、栗原市の職員、若手のみなさんに市長室に来て言いたいことを言いなさいということで、観光をテーマにして 90 分話しあいました。いろんないいアイデアが出ました。その中で、はっと思った、ある人から言われたことが、市長、築館にいい場所がある、と。どんな場所だと聞くと、その下に新幹線が通っている。そこは昔は公園でした。そこから新幹線が真下に見えるのですが、その場所もひょっとすると素晴らしいところになるのではないかと、そういうものも一つも観光ポイントに考えてみるとどうでしょうかという提案がありました。いい提案がたくさんあり、その中で意見交換できる場、すなわち今日の場がまた大きな別の盛り上がり方になってくるのではないかと期待しているところです。

今年一年、いよいよ納めの時が来ました。いろんなものを振り返りながら、前に向けてみんなで明日へ向かって「明日へ」という大きなテーマを持って歩んでいきたいと考えます。今日は寒い中、有意義な一日になることを祈念しまして、開会の挨拶に代えます。

よろしく願いいたします。

(司会)

それでは第一部基調講演を始めます。「地域の価値の再認識（学び）と人材の育成」と題しまして、早稲田大学総合教育学科学術院教授、文学博士の宮口先生にご講演を頂きます。

初めに宮口先生のプロフィールをご紹介します。東京大学理学部地理学科、同大学院博士課程において、社会地理学を専攻、1975 年から早稲田大学教育学部に勤務され、1985 年に教授になられ、現在に至ります。ご専門は社会地理学、地域論です。富山県富山市にお住まいで、地方と東京を見つめる生活を 20 年以上続けていらっしゃいます。総務省過疎問題懇談会座長や、富山県景観審議会会長、全国町村会道州制と町村に関する研究会委員など、国や自治体の各種委員を務めていらっしゃいます。先生にはたびたび栗原において、ご指導いただいているところでございます。それではご講演を頂きます。

宮口先生よろしく願いいたします。

(宮口)

皆さんこんにちは。早稲田大学の宮口です。栗原には 4 年前くらいからたびたびお邪魔させていただいております。私が栗原に来るようになったのは、地震で亡くなった麦屋さんが毎月栗原の指導に通っておられて、一緒に勉強会のようなことをやっていただいております。私が心の底から敬意を払っていた麦屋弥生さんと歩いた町ということで、一番日本の中で思い入れのある町のひとつです。今日はこういう会を企画し声をかけて頂いて喜んで参りました。栗原では市長も言われましたように例年、観光、グリーンツーリズム

というものを進めておられます。
これは本当に地道な積み上げと言
いますか、急に人がわっと来てお
金を使うというような観光づくり
ではない、ということで、みなさ
んの参加、そして次世代の参加が
必要です。今日名簿を見たら高校
生の方が載っていたのですが、来
てらっしゃいますか。私としては
これを見て非常にうれしかったの
です。今日たまたま最後に地元
にある高校の話をする予定でおりま
したので、ぜひまたいろいろお考えいただきたいと思います。



それから今、“らいん”というお話も出ましたけれども、今回2年ぶりに来たわけですが、その間に着実に何かが生まれている、これが実は地域の活性化と言うことであります。ぜひ自信を持って着実に進んで頂きたいと思います。

以上前置きで、レジュメに沿ってお話させていただきたいと思います。

こうして座ってテーブルを用意していただいているのは、通り一遍の講演会ではなくて、勉強会の雰囲気により近づけたいという意味であると思っていただきたいと思います。今日はいくつか配布資料をつけました。まず「都市と過疎地域」という文章があります。これは後で言及しますが、世の中には都市と人口減少に悩む過疎地域と言うものがあります。しかしそれぞれに価値がある。私がずっとやっている地理学とは何かといいますと、世の中何でいろいろ違っているのだろう、と、大都市になるようなところもあれば、山の中の村もあります。そのような様々な違いが世の中にあるのだけれども、それぞれにそれぞれの存在価値がある、山の中は山の中にあるから価値がある。それを活かすことができればいいわけです。ところが都市がどんどん成長する高度成長の時代に、家がどんどん建つ都市ばかりがいいところだと思われる、人が減るところでは、そこに合う工夫と言うものがなかなか生まれなかったということでもあります。と言うわけでそれぞれに価値があるのだよと。都市といっても、また後ほど詳しくお話しますが、この栗原は大きい都市ではありません。ただ、それぞれの旧町村に小さな市街地がある。そこにはお店があり、人と人の語らいがある。たとえば靴屋さんがあってお客さんが「もっとこういう靴はないの？」と、そうすると靴屋さんが色々考えてくれるとか、そういうお客さんとお店のやりとりがにぎわいと言うものの本質であります。ですから小さくても人が接触する場がちゃんとあるということが大切なのです。都市というのも、都市の価値は大きさではないのです。ですから当然お店も減ります。その中で、どういう価値を創りなおしていかなければということがこの栗原の課題です。周りが田んぼでちょっと後ろには山がある。そういうところの課

題だということでおいてください。

次に、「交流と I ターン」という文書の最初のところだけ見ておいてください。「滞在型交流そして、I ターンと地域の活性化」という文章です。地域の活性化とはどういうことを言うか、これは私の年来の持論です。高校生の人もいらっしゃいますが、活性度が高いとは化学反応しやすい状態だと言うことです。活性酸素とは体の中に入って困った物質をつくる、活性酸素と呼ばれるのです。

町の活性化というのは、人と人の間に新しい反応が起きる、新しい付き合いが生まれる、また人とモノの間に新しい付き合いが生まれる。たとえば千葉恵子さんの長屋門カフェについても、長屋門と言うものは昔からあります。しかし、ある人がそれをどう使おうかということで、そこにひとつの化学反応が起きるそうやって新しいものが生まれる、そうなりやすい状態を活性化しているというのだという風に考えています。活性化、活性化と漠然と使われている中で、人口が増えないと活性化じゃないと思っている人も世の中にはいるようですが、そもそも今の日本では人口が増えるところは、特別の条件のところでは減ったからと言って嘆くことはありません。それは普通のことなのです。その中でどういう新しい付き合いが生まれるかということが大事です。

というわけで、私はこの“らいん”というものが生まれているということに関して大変敬意を表したいと思います。

前置きはそのくらいにして、考えてきたレジメに沿って話を進めていきたいと思います。

まず 1 番、「自らの地域を語れるようになろう」。これは、くりはらツーリズムネットワーク、あるいは“らいん”等々のいろいろな活動で、地域にこんなものがある、これはどんな意味があるのだろうか、というある意味で学びの会です。学ぶと人間は豊かになるのです。なんでみんな本を読んでいるか、教養をつけようとするか、それは豊かになるためです。そして世界に通用するような教養というものがある。しかし、この地域にどんなものがある、それにどんな意味があるのだろうか、というようなことは、東京で売っているような本には書いていない、ということです。最近世の中そういうことが重視される時代になってきましたので、テレビの番組でもローカル線でのんびり行くと良いことがあるというような番組が増えてきたりしていますが、地域の価値を語る、地域のことを語れるということは、そこにこんな松の木がありますよ、というだけではだめなのです。その松がどんな松で、どこまでその松があるのか、どこまで行くとなくなるのか。こないだ震災で一本だけ残った松というものがありましたけれども、そのように他と比べて語れるようになるということがほんとに語れるということなのです。長屋門がさきほど 540 あるということでしたが、10 年 20 年前には、長屋門はあって当たり前と思われていたでしょう。しかし、ちょっと行くとなくなるわけです。これはここにしかないのだ、誰がいつごろ作ってどんなふうに使ってきたら、今これを活かすとしたらどんな使い方があるのだろうか、という風に頭が働いていく。これが、自らの地域を語れるということです。世界はきりが無いわけですが、日本なら日本というまとまりがつく、それぞれの地域と、そこに全体と

個体とありますが、日本という大きな枠の中にありながらも、すごく違うところもあれば、よく似たところもある。東北は全体として、比較的よく似ております。まさに、山があって田んぼがある穏やかな風景が、日本の中で一番残っています。もちろんそれは、単純な都市化ができなかった地域が多いということですが、都市の真ん中に住んでいる人から見ると、この栗原というところに来ると落ち着きますね、人が穏やかに暮らしていることが伝わってきますね、ということになります。一昔前は、あなたは東京で日ごろは華やかな暮らしをしてたまにしかこういうところに来ないからそういうけれども、ここはたいへんなところなのだよ、とか、雪も降るのだよ、とか、マイナス思考で対応をしていたのですけれども、そうだよ、ここはいいところなのだよ、ちょっと一週間くらい居て見なさいとか、場合によっては家に預かっていいよとか、そういうような返事が今日本で結構聞かれるようになりました。これは田舎の人がそれだけ学んだということなのですね。

今年大変な震災があり、かつては内陸地震で大変な被害を受けられました。そういうことはありましたが、しかし、全体としての基盤はしっかり残っている、それをどう守っていくかは地域の人の力だということです。そういう地域の持つ価値をちゃんと育てる、ここにはこれがいいのだという風に育てていくには、人は勉強して力をつけないとできない。そういうことの指導に、麦屋さんは通っておられた。地域の人と一緒に歩いて、「ここ素敵じゃない」、「あなた達分かってないでしょ」、と、そういう会話をかなりされたのではないかと思います。

人材を育てるという言葉があるのですが、それは若い者を育てるではないのです、自分がまず育つということが大事なのです。それなりに有力者の方も今日はいらっしやると思いますが、成長ということはきりが無いのですね。新しい学びというのは自分に刺激を与え、老化を防いでもくれる。というわけで、そこに人材として自ら育つべしとありますが、若い人もそうあってほしいと思います。

また、行政が金をかけて、何かを育てる、人材を育成する。しかし下手な育成をすれば都会へ行って活躍してしまうだけと言うことになってしまうだけということ、今まで過去に行ってきたわけです。

では、日本とはどういうところなのか。今日は私の話を聞かれたことのない方もいらっしやると思います。あるいは何回か聞かれた方はなんかこの写真は見たことがあるなと思われるかもしれません。

この日本というところは、山々が樹木におおわれている。川には清らかな水が流れている。実は、どこへ行っても世の中そうではないのです。山に木が生えていると言うのは、東南アジアに行っても同じと思われるかもしれませんが、実は相当今山は荒れています。それは日本が木材を輸入したせいでもあるのですね。山の木をどんどん切って、もともと勝手に生えていた木なので金がかかっていない、日本の杉は手間暇かけて育てているので今の材木の値段で売るといくらにもならないから山主は売らない。無駄になっていく。

日本は 7 割が森林の森林大国ですが、それがちゃんと残っている国というのはそうない

のです。人工林の面積だけで1千万ヘクタールを超えている国は世界に例がない。みなさん、日本が小さな島国でたいしたことがないと言うのは間違いです。世界一の森林大国なのです。もちろん、シベリアに行けば誰が植えたわけでもない木が勝手に生えています。それをどんどん切り出して売っているわけですがけれども、手間暇かけて植えて育てて来たのは日本だけです。それがすごい面積になっている。ただ、それが売れないものだから、半端な状態で今あると言うことなのです。

ともかく、後ろに山がある、これは富山県の砺波平野というところの山麓なのですが、手前の山が裏山ですね。裏山というのは東北でもそうですが、村落の共有林として皆で守ってきているわけです。ここには杉が植わっていますが、山の下に田んぼがある。これが日本中にある風景です。これは富山県東部で、後ろに3,000mの山まである。みずみずしいです。こういう風に、山は山として残しながら、田んぼを作ってきた国なのです。

東南アジアに行くと、山には山の民族が住んでいるのです。そして焼畑したりして結構山が荒れているのです。ところが日本はひたすら田んぼで頑張ってきましたから、だから山は山として美しい。今日は栗駒山の写真はありませんが、いつか私も一度紅葉の時期に山を案内してもらいたいと思っています。みずみずしいです。

実は、暑い夏に水があるということが日本のすべてなのです。東北もそうです。梅雨の雨は少ないですけど山に雪がある。ここも富山ですから雪国です。川の水は尽きることない。こういう風に家が散らばっている。栗原にも似たようなところがありますけれども、こういう風に立派な屋敷林がある。これは一軒の農家ですけれども。何で屋敷林があるかというと、風が強いからというだけではありません。屋敷林を作ることによって少しでも落ち葉と枝、要するに薪と肥料のための落ち葉を少しでも用意するためです。東京の江戸時代の武蔵野の開拓地にはやはり平地林と言って林が残されていました。だから山というのは農業に不可欠なものだったのです。だから、裏山を持っていれば安心して田んぼを作ってこられた。

夏に雨が降り水がたまる。これはほんとに多様な命が育つことです。山にはいろんな木が生えている、まわりにいろんな動物がいます。命が育つのが日本という国なのです。それを人間の生業にするのが農業です。地球上のもっとも優良な農地です。これは昔の講演でも何度も言いましたが、日本の田んぼはヨーロッパの小麦畑の8倍の価値がある。日本で10町歩の水田を持っていればヨーロッパで80町歩の畑を持っているのと同じなのです。それぐらいの価値があるのだけれども、日本全体の経済成長の中で農業の価値というものがどんどん低くなっていったということです。

こういう風に山の下に家が並んで、その周りに田んぼがある。山には木が生えている。特に東北の場合は紅葉が美しい。これが日本の農村の姿です。そしてこれは人間が営々と働き作ってきた姿です。営々と蓄積した風景です。今の時代、経済成長を通り越して、都市の産業がどんどん栄えて、もっとも人が入って就職があるという時代ではありません。都市で職を失った人がたくさんいます。そういう時代に、今まで持ちこたえて来たこ

の姿、改めてその価値をみなさんは大いに主張、語るために、ちょっとした勉強をしてほしい、ということです。

山に紅葉があるということは、冬があるからです。南の方に行きますと、葉っぱの落ちない広葉樹ばかりです。一年中緑です。私はこないだ北海道のある農村に行ってきましたら、シンガポールの人が来て葉が全部落ちた枯れ木の山がすごく美しいと言って、感動して帰ったということでした。紅葉を見ればもっと感動したと思いますけれども、シンガポールには緑の葉っぱしかない、飽き飽きする、ということです。いろいろなもの見方があるということです。ですから、寒い冬がないと紅葉はないのです。と思えば、冬は寒くなって当たり前なんだと、寒いから嫌だなあと愚痴ばかりこぼすことはないでしょう。そのためには秋の栗駒山を歩いて、素晴らしい紅葉に感動するということも大事かもしれません。ということで、ちゃんと理屈がある。雪が降るから田んぼの水がある、寒い冬が来るからきれいな紅葉がある、というわけです。私はこのほんによというのが好きで、麦屋さんも好きだったのですね。こういうほんによに彩られた東北の秋が、去年おとし、またちょっと復活していると聞いていたのですが、その後どんなものでしょうか。面倒なことは嫌だと当然減ってきていたわけです。しかし、それはほんとに面倒なことなのか。勤め人が時間に追われて、あわただしくやるのは大変です。都市でリタイアした60代の方が運動のためにお金を使って汗を流しているわけですね。しかし、自分の土地で、自分のペースで、自分の意思で、人にこき使われて働かされているのではないわけですから。自分の土地で自分の思いでやるということは面倒なことではないのではないはずだ。そういうことが一つの学びであり成長です。面倒な仕事をしている人はたくさんいます。難しいことを研究している。そういうわけで、そういうことを自ら考えて頂きたいと思います。

くりはら研究所だよりというものがありますが、最新号に「くりはら観光塾 写真家藤田洋三氏に学ぶ、資源の観方、観つけ方」に、ねじりほんによという記事が取り上げられています。地元の方はご存知と思いますが、このほんによのかけ方にもいろんな技がある。世の中にレストランでおいしいものを食べる、いろんな評論家がありますね。味の分かる人です。味が分かるということは、成長したということです。このほんによだって、味がある。それがわかってそれが作れるかと。そのようなことを話題にしていきたい。それが取り上げられていたということは、やはりこの町の田園ツーリズムに成長があるということだとおもいます。この田んぼがみんな荒れていたら、美しくないでしょう。しかしこういう茅葺のところに田んぼがしっかりとつくられている。これは世界遺産の富山県の合掌造りの集落です。

それから能登半島の千枚田、ここには5株しか稲を植えられない小さな田んぼがあります。そこまで作ったのですね。

新潟の山古志村は、栗原よりも前に大変な地震で壊滅的な被害を受けました。ここは山の斜面に穴を掘ると水が出てくるものですから、上の方まで棚田ができて、いつしかその棚田で鯉を飼って、錦鯉の本場になってしまった。いま、減反して池が増えています。錦

鯉の池です。こういうものが一杯あります。山古志村は集団で移転していました。村の団結、絆を保っていましたので、ほとんど壊滅状態でしたが7割近い人が戻っています。

伊豆半島のこの棚田は、実は全部荒れていたのです。伊豆半島の海岸というのは、昭和40年代50年代に、民宿が結構流行りました。その後みんな海外に行くようになってしまったのですが、東京の人が千葉や伊豆にけっこうたくさん家族連れで来ていた時代ですね。それが忙しいので田んぼをやめてしまったのです。しかし、この人たちが集まって、なんとか田んぼを元に戻そうじゃないか、と、10年ほどかけました。その間、県の農政課や大学の学生が支援した。そういう人たちの力を借りて、手作業で頑張って復活した。

山口県のすり鉢棚田と言われていたところ、ここも30年ほど荒れていたのですが、地元の心ある人が、俺達の財産はこれだけだからということで、みんなで頑張って、今作っています。そういうことは、学べば、面倒なことではなくなるのです。楽しいことになるのです。

四国、九州に行きますと、山は急斜面になって、絶対に田んぼができないところがいっぱいあるのです。みなさんが信じられないような山の中腹から上の方に集落があったりします。東北は実はそういうところには住めないから住まなかったのです、冬が長い。ところが、南に行きますと、一年中畑ができる。そうすると能率の悪い山の畑でも何とか食べたのです。だからとんでもないところまで住んでいるのです。今は大変です。東北はまだ楽なのです。とんでもない所に住んでないですから。だいたい田んぼがある低い所にしか住んでいません。ぜひそういうことも知っておいてください。実はこの段々畑も一時荒れていたのですが、ここの出身の早稲田の女子学生が、この畑は私の誇りなのに荒れています、助けてと言うようなことをインターネットで伝えたら、人が結構来て、応援するよと。地元の人もしょうがないということでまた元に戻した。最初はしょうがないでいいのです。でもやっているうちに元気、気合が入るようになるのです。

ヨーロッパへ先月行って来たのですが、この橋、なんだと思いますか？これは一番上に水が流れている。これは都市に水を送るための水道橋です。2000年前のものです。ローマ帝国というのは、都市をつくっては支配を広げていった。その都市は守りやすいように小高い丘の上で水がありません。こんなものまで作る。だから都市というものを作るためにすごいことをやってきたのです。日本人は田んぼを作るためにすごいことをやってきた。ということです。こういう水道橋がたくさんあります。そして都市にはこういう城壁があります。こういう古い町がヨーロッパにはたくさん残っています。ですから、栗原の中の町も、捨てたものじゃない。大きい必要はないのです。そこにある、だんだん減っているけれどもお店が頑張っていていい商いをしてくればそこに人が寄ってくる。頑張っている酒屋さんとかいろいろありますよね。

トロワの町のようにうまくいくと観光地になります。これは木造の建物がたくさん残った町です。なぜ残ったかという経済発展しなかったからです。先ほどの世界遺産の合掌造りも、広い道路が真ん中を通っていればあんなものは残っていないわけです。細々と受

け継いできた。でもあるとき、世界遺産となって観光地になっているわけです。こういう町の中に人が集まって語り合っている、これが実はヨーロッパのすごいところですよ。ですから、町はヨーロッパに学ぶ。農村は日本が先生だ、というのが私の基本的な考え方です。

ドイツの都市には、自動車も全部締め出して、路面電車だけというフライブルクのような都市もあります。この路面電車もゆっくり走る、何も急いで走ることはありません。というわけで、人と人が顔を合わせる。刺激しあう、これが都市というものの本来の姿です。東京のような大都市になると毎日満員電車で顔を合わせてもそこには語りとか何もありません。たくさん人はいるけれども全部知らない人だということになります。



日本と違う世界はこんなところがあります。ヨーロッパは全体が平野です。森はそんなに残っていません。ひたすら畑、もうひとつは牧草地。実はこの小麦畑の価値はたいしたことがないのです。収量が低いのです。これが小麦畑です。果てしないです。ただ、荒れていません。実はヨーロッパというのは 1950 年代、今から 50 年以上前から、ちゃんとした共通農業政策というものを行ってきました。今ヨーロッパが EU という仲間を作ったのはご存知ですね。その前の段階から、域内の農産物は決まった価格で買い上げるという政策が 50 年以上続いている。ですから農業をやりたいと思う人が安心して

やれますから、ヨーロッパは農地が荒れていません。EU、ヨーロッパ連合の予算の 8 割が農産物に使われた年があります。要するに農業というのは基盤を支えるものだからはっきりした合意ができてから、農地が荒れていないのです。そういうことを続けていけば、意欲のある人が農地を買い足して、規模拡大が緩やかに進みます。そういうところが学ぶべきところですよ。

そういうわけで、土地生産性はたいしたことがない。これはオランダというまっ平らな国の牧草地です。牧草地は家畜を育てるためのものです。家畜は何かというと喰い物です。日本では農耕馬でした。ですから、ヨーロッパは肉食なのです。肉をたくさん食べる。これはヨーロッパが平らということで、いたるところに運河がある。船でモノを運ぶというシステムが古くからあります。これはゴッホが有名な跳ね橋という絵を描いた町ですよ。

スペインのとある山は、山に一本も木がない。山に木があると言うのは当たり前ではない。それは日本の常識です。全部牧草地にしてしまったのです。家畜を一匹でも増やしたいからです。喰い物を増やしたいからです。下は小麦畑です。そしてオリーブの木をこうしてたくさん植えたりしています。これも喰い物を作るためです。日本で山に雑木林があると言うのは山で喰い物を作る必要がなかったからです。田んぼで頑張れば何とかなっただけです。そのオリーブの木の間でさえこうして羊を買って喰い物を増やしてきたのがヨーロッパですよ。

スイスのこの山の斜面全部牧草地です。あるいはこういう谷底、畑にもなりません。土がないのですね。氷河で削られている。ところが、スイスの食料自給率は6割近いのです。なぜか。農業は国の基盤だから限度まで農業をしてもらおう、そのためには農業にはお金を出す、ということがはっきりしているからです。

フランスの谷底など、こういうところで家畜を飼い、チーズを作っている。ですから、小さな山の中の村でもいいチーズを作ればちゃんとやっていけるわけです。このおじさんは雇われチーズ職人ですけれども、威張っていますね、俺のチーズは世界一だと言う感じですね。それからブドウ畑、ブドウというのはガラガラの土でろくでもないところで作るのが実はいいのです。日本で無理してワインを作ることは、私はあんまり賛成ではないのです。ブドウというのはもっと厳しい土地で真価を発揮する。しかもお天道様がたくさんなければいけない。フランスのボルドーにシャトーと言ってこうして大生産者がいたりするのです。そういう様々な暮らし方様々な土地の使い方が世の中にはあります。そういうワインの畑の中の小さい町が、ヨーロッパではいま結構観光地になっています。ホテルは並んでいますが道も狭い。

土地生産性が高いというわけで、日本は田んぼが1町歩なくても何とか食えたのですね。山間部の百姓でも、もちろん貧乏はしたでしょうけれども、なんとかなった。不思議なところなのです。ですから、小規模ですが集落を単位に支えあってきたわけです。小さい田んぼでも何とか生きられて、その土地の上でいろんなことが蓄積していた。集落単位に支えあってきたということです。そしてそういう農村の中に小さな町、小都市が点在し、そこでモノを売る技、あるいは職人さん。私が初めて栗原に来るときに麦屋さんが私に言ったのは、「先生、栗原には最中の皮を作るおじさんがいるのですよ。」と。私も見に行きました。そういういろんな手仕事が息づいて、町というものが成り立っていた。今意外に受けるかもしれないものがたくさんあるはずですが、そういうわけで、大事な事ですが、都市は大きさに価値があったわけではない。人と人が集まり出会う、いろんなやり取りがあるところに価値がある。農村の人は花嫁道具を買いに町場の家具屋さんに行って、そのおじさんに、じゃあこんなのがいいよとかそこで相談していたわけです。支払いは米がとれたときで良い、お願いします、とか、そういう様々な関係があったわけです。

そういう風に、人と人のやり取りがあれば何かが生まれるということだと思います。

では3番目、「系列化の時代にいかに生きるか」。高度成長期、都市の産業が栄えてどんどん若い人が出ていきます。そういう時代も、もう通り過ぎました。今は都市の大きな企業が、田舎の産業まで系列化するようになっている。栗原にはイオンがありますから、分かりやすいと思いますが、ああいうものが全国に出てきて、非常に便利になっている。買い物場ができる。場合によってはお客様が集まりやすいようにとか子供の遊び場とかいろいろ工夫がされている。それに小さなお店もうちにどうぞということで、そういう系列化が進んでいます。これは一般企業でもそうです。どこそこの企業がどこそこに吸収された、というような話は毎日あります。それは流通情報化が進みバーコードがあれば、全

部本部管理でできてしまう。これがまた大変な時代を作ってきた。距離とか関係ないわけです。今、地方では自分達で作ったものを自分達で売ろうよ、という地域がかなりあります。基本にあるのは手仕事の技です。規模が小さくても、ちゃんと日本の中で評価してくれる人がいる、あるいはたまに外国の人が買ってくれるものがある。そういうものを作れば、数が少なくても自分は生きていけるというようなものが生まれるだろうと思います。ですから、米にしたって、自分ところのコメは農薬も使いません、ちゃんと管理しておいしいコメを作っていますと言って、逆にインターネットを利用して売っていく。というような人もいるわけですが、基本的にはそういうことです。地域づくりというのはそもそも、この地域に、今の時代にふさわしい価値というものをどうやって積み重ねていくかという作業です。一瞬にしてできるものではありません。そういうものを育てて売りにする。では自分達は何をやるか。栗原市はツーリズムの育成であり、“らいん”の冊子を見ますと、かなりそういう雰囲気になっていると思います。基本は大きな都市で作れないものを自分達は持っているし、作ることができる、そこに尽きるわけです。次第に世間の目もそういうことに目が向くようになってきた。そういう点で「家族に乾杯」などの番組も増えている。大きな都市では作れない地域資源を持っているか育てるかということへのあらためての学び、というわけで、栗原ではみなさんがそれを非常にいい形でリードされている。その後このくりはらツーリズムネットワーク、くりはら博覧会“らいん”というものが育っていったということが素晴らしいことだと思います。

4番目、「人と資源をどう育てるか」。最初に資料で少し説明をしました、活性化しているとはどういうことか、いろんな反応が起きて何かが生まれやすい状態です。あんまり古いままの役割分担が決まっていて、議論の余地がない、いろんなことが決まっている、とっていたのでは、何も新しいものは生まれません。よく言いますが、動きのない水はいつしか濁り腐っていきます。そういうものからはなにも生まれません。ですから、誰かが動きを作りだす。人と人が接触する、そういうきっかけを作りだすことが必要です。もちろんそれは行政の役割でもあるわけで、それが栗原の場合は、田園観光課という課もあり、いろいろな働き掛けがそこで行われてきたわけです。そういうことが大事なわけです。その中でできるだけ新しい世代も巻き込んでいって頂きたい。お年寄りが威張っているだけでは若い人は入ってきません。確かに経験が浅ければ、経験の長い人には当たり前のことでも簡単にはできない。それを馬鹿にしているだけではしょうがないですね。まさに、引き上げる、いろいろ学んできた人は次の人を引き上げる。日本語には足を引っ張ると言う的確な言葉があります。足を引っ張ると言うのは勉強してない人でもできるのです。人が高い所にいたら足にぶら下がればいいのですから。何も頭を働かせなくてもいいのです。地球の重力で下へ引き下ろすことができる。しかし引き上げると言うのは簡単ではないわけです。引き上げるためには引き上げるだけの力を持たねばならない。力というのは腕力だけではありません。頭の力、あるいは技の力、教えの力、引っ張る力、育てる力、いろいろありますが、というわけで育ちかけた人は足を引っ張られないようにしなければなら

ない。引っ張られない一番のコツは、横にスクラムを組むことです。よく土俵から引きずりおろすと言ういい方があります。その土俵の上で4, 5人が肩を組んで入れば、一人の足が引っ張られたくらいでは、どうってことはないわけです。

ここに観光塾という言葉が出てきましたが、私は全国で地域づくりの塾というものも付き合いがあります。そういうものを作っている市町村もありますし、全国的なリーダー養成塾というものもあります。塾とは、要するに、学びの仲間。学びの仲間とは常にそうやって肩を組んで、誰かが引きずりおろされないように、ということが大事です。そういう横のやり取りとして、全国地域づくりリーダー養成塾というのがあって、全国からばらばらに東京に集まってきて勉強会をやるのですが、やっぱり地元に戻ると冷たくされたり周りの人が話を聞いてくれなかったりするわけです。そうすると、仲間に連絡して、場合によってはそこへ2, 3人駆けつけて、地元の人と一緒に議論をしたりする、ということもやられています。ぜひそういう付き合いも大切にしたいと思います。

人と資源の反応として、農家民宿、長屋門カフェがあります。ここで私も麦屋さんと一緒にごちそうになったりしました。長屋門研究会も既にたちあがっているようですね。そこに普通にあるものというのは、何度も言いますが、地元の人は今までは感動していないわけです。子供のころから見慣れている。世の中そういうものだろうと思っているわけです。そこで学び直すことによって感動できる、そのためには広い世間、世の中はこんなに違うんだ、ここにしかないものがあるのだなということ語り合い、見せ合う、自分達が持っているものをさらけ出していく。たとえば、ある町ではお雛様を飾る、土蔵から探してきてうちにこんなお雛様があったと、それをみんなで見せあう。そうやって見せ合うことによって文化を高めていく、ということで力を合わせていく。内輪だけで勉強会をしても世間のことが分からなければしょうがない。そういう意味でも、麦屋さんは大変貴重な人であったということです。

そして、5番目、「地域は単に客観的な存在ではない」。よくここは温泉もない、だからしょうがない、という話をする人が一昔前にはいました。実は温泉があれば栄えると言うものでもない、つぶれた温泉旅館というものも世の中にはいくらでもあります。ということは、その温泉をどのように使うかという技が問題なのであって、温泉がなければ別のものを使う。そういう技があればいいわけです。それを頑張ってやる。そこに蛮勇をふるう力がなにかをつくりだす。客観的な条件よりも、山中の一軒家の宿でも工夫が行き届いていれば栄えるということです。何の変哲もないと自ら嘆く前に、他人の目で見るとそこに違う価値が見える。ということです。栗原は頑張っておられますけれども、人が力をつけるために背後から支える行政の仕組みというものが不可欠です。栗原は佐藤市長になられてから営々と続けておられると思います。

地域にはいろんなタイプの人があります。こういうことならあの人に力を発揮してもらおう。今度こういうことをやるのに誰かいないか、こういうものは高校生に頑張ってもらえばいいのではないか、そういう違う力をピックアップしてつないでいく。これも、協働と

ということが今はやりなのですけれども、これは本来そういう意味で使ってほしい。抽象的な話ではありません。Aさんはこういうことが得意だ、Bさんはこういうことが得意だ、Cさんはお金を出してくれるかもしれない。というのをうまくつないでプロジェクトを作っていく。人と人の問題なのです。単に住民と行政の協働なんて掛け声ばかりではわけがわかりません。協働とは人と人をつなぐ組み合わせで飛躍的な力にすることなのです。そういうことを意識していってもらいたい。そうすると、誰がどういうことができるか、昔の日本は村の中でみんな同じようなことをやってきたので、そこに特別に力を発揮してもらう必要はなかったのです。しかし過疎化が進み高齢化が進み、頭数だけでは物事が動かない時代になった。じゃあこういうことにはあいつを引っ張る、そのためにはまさに人材というものを把握しておかなければならない。誰がどういうことができるかというのはそれをやる場面が出てこないと見えてこないです。まだまだ隠れている人はたくさんいると思います。ぜひ、そういう場をたくさん作ると言うことも大切です。

最後に「次の世代をどう育てるか」。これは町村週報という、全国町村会の冊子に私が時々書いているものです。栗原は市になりましたので残念ながら入っていないと思います。島根県の隠岐の島という大きな島の横にもうひとつ中ノ島というのがあって、ここに海士町という町があります。栗原のような便利どころではなく離島で不便です。当然過疎化高齢化が進んでいますが、海産物でいろいろ頑張っている。実はそこにひとつしかない高校が、2クラスあったのが受験生がいなくて定員に満たないと言うので1クラスに減らされていました。この海士町というところは、町のいろんなアイデアで全国から若者が結構入りこんでいるところなのです。入り込んできた若者に島のプランを立てることを任せたり、地域づくりという点では非常に有名な町なのですけれども、この高校を何とか存続させなければ高校生がいなくなる。もちろん今でも高校を出たらほとんどいなくなるわけですが。それに1クラスだと先生も制限されて各教科の専門の先生がちゃんといない。ある時期は物理の先生がいなくて、物理の先生がいなくて国立大学に行くなんてことはまず不可能です。というようなことで町長以下危機感を持って、東京と大阪で、この島はこんないいところなのですよ、といろいろ宣伝活動をする。で、寄宿舎は全部町で持ちます。食費も補助します。ということで、今東京や大阪からも受験生が来るようになりました。そして去年ついに、40人の定員を大幅に上回る受験生が集まったとそうで、来年からは2クラスに復活させることに県教委も決めたということです。その高校生達に町はどうしているか。やっぱり勉強ができて、国立大学を受験したいという子どもがいる。その子達には学習センターを作って、そこには東京の一流予備校の先生に来てもらっています。そういうことに意義を感じて、早稲田の理工学部の大学院を出た男もそこで、夕方から教えています。もちろん、学校の先生とタイアップして教える。それから、勉強よりもっといろんなことがしたいという高校生にはまちづくりコースというのを作って町の中、島の中のことをいろいろ教える、そしてこれからのまちづくりをどうすればいいかという勉強会をしてもらうというようなことまで、今そこではやっています。私は非常にそれに感動して、その高校

だったら特別講義に年一回くらい行きますと言って、今年の秋にお話してきたのですけれども。栗原の場合、大きな高校がいくつもあるようです。しかし地域における高校、そして高校生が何を学びそこでどうやって育っていくかということも、地域の将来にとってすごく大事なことです。私は富山県の山村の生まれで村の祭りへの参加は欠かしたことがないです。自分の村の山河で目いっぱい遊んで育ち、そこには面白いおじさん達がありました。鮎のつかみどりの名人だとか、いろんな人がいていろんなことに感動して育ちました。今でも村の祭りに行くと、今 80 歳くらいの方が昔遊んでくれたおじさんたちで、喜んでくれる。そのように次の世代とどうやっていい関係を作っていくか。ということも大きなテーマだろうな、と思います。そういうわけで、最初にも話しましたが、今日、高校生が来てくれているということは、本当にうれしいことです。

ここで話を終わりにさせて頂きたいと思います。これからいろんな発表ややり取りがありますので、その中で学んで頂きたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

(司会)

宮口先生、大変貴重なお話をありがとうございました。

第2部:地域づくり活動団体に活動紹介

くりはらツーリズムネットワーク 千葉 秀知 氏

花山村塾 千葉 優子 氏

くりはら磨き隊 菅原 敏允 氏

山菜茶屋ざらぼう 伊藤 廣司 氏

(司会)

それではこれより、事例発表に移ります。最初の発表は、地域資源を活用した交流体験プログラムをテーマに、くりはらツーリズムネットワーク事務局の千葉さんに発表していただきます。

(くりはらツーリズムネットワーク事務局 千葉)

くりはらツーリズムネットワーク事務局スタッフ、千葉秀知です。よろしくお願いたします。まず簡単に、くりはらツーリズムネットワークの団体紹介をさせていただきます。今から2年前の2009年12月、第4回宮城グリーンツーリズムネットワーク栗原大会を、栗原市内のグリーンツーリズムの実践者が集まり、実行委員を結成し、開催されました。その大会の第3部、「こたつでフォーラム」で団体設立の賛同を得たことから、設立発表の会を開催し、くりはらツーリズムネットワークを設立しました。

設立時の3月の会員数は、個人会員、団体会員、賛助会員あわせて48会員数でしたが、現在、会員数は、51の個人会員、27の団体会員、3名の賛助会員、81会員数、設立より1年7カ月で設立当初の1.7倍になっております。栗原市の地域資源を活用したものであったり、栗原市に住む人の技であったりと、体験プログラムを行える会員様が多く存在します。さらに、数種類のプログラムを提供できる会員も多く、会員同士のコラボレーションをしたプログラムなども増えてきていまして、実際の体験プログラム数は、数えきれないくらい数多く存在します。主な活動内容は研修、広報、交流を柱にしています。今回交流事業についてということで、地域づくりインターン事業の受け入れ、体験や民泊の受け入れ、栗原博覧会“らいん”の開催、となります。

本題の地域資源を活用した交流と体験のプログラムということで、くりはらツーリズムネットワークが行った1大イベントのひとつ、



くりはら博覧会“らいん”についてお話しします。こちらが活動の写真になります。38プログラムが行われました。栗原市の資源を交流しながら体験し、栗原の魅力を楽しみ、再現、再発見する、参加型博覧会です。今年10月1日から50日という期間中に、41のプログラムを作成しました。プログラムの種別としてやっていた“らいん”が10プログラム、農業の体験、栗原の郷土食の教室、手芸教室だったり、素晴らしい技術を持った職人さんやアーティストの方と交流しながら体験できるプログラムでした。みんなで集まって散策したり、話を聞いたり、地域の特徴を地元の方やガイドさんと交流しながら楽しく学ぶ、その空気を感じながら体験できるプログラムでした。

41プログラム作成した中で、実施した35プログラム、さらにイベントで9月10日に行った手前味噌でしそ巻教室、とオープニングイベントあづまらいんを合わせまして、493人の方の参加がありました。毎日のようにくりはら博覧会“らいん”が栗原市内の至る場所で行われました。アンケートは493人中381人から頂くことができました。平日に行われたプログラムも多かったせいかもしれませんが、女性が7割、年代は60代以上で半分を占めました。そして参加者は、偶然にも77.7%が栗原市内からということで、市内の方に栗原市内の魅力を改めて再発見してもらい、自信を持って栗原は素敵な所だと言って頂ける知識が増えたのではないかと考えております。参加したプログラムはいかがでしたかという問いでは、4段階評価の中で、すべてのプログラムが最高評価とは言えませんでした。おおむね良好という結果となっております。これから先すべてのプログラムを最高評価にしたいという目標も生まれました。市民の方に多く参加してもらったのもうれしかった理由ではありますが、くりはら博覧会“らいん”を開催して、どれだけ地域の宝が見つかったのが、どれだけ地域住民が強く結ばれてきたか、地域にこんな素敵な方が住んでいるのだと再発見できたか、地域に住んでいることを自信を持って発信しているか、地域の夢を語る人材が何人生まれたか、ということが一番の目的でした。今回の事業で、私達事務局の役割としては、受付業務もそうなのですが、栗原市にある資源や市民の出番をつくり、そして、その気になってもらい元気になってもらい、さらに栗原を好きになってもらうことでした。現在、プログラムを主宰して頂いた方から、栗原博覧会を実際に行ってみての意見や感想を集めている最中ですが、その意見や感想と、その後実際に交流事業を行ったくりはらツーリズムネットワーク会員の3人の方に、それぞれの発表の中からこれからのくりはらツーリズムネットワークの活動の経過と今後の道筋、課題が見えてくると考えております。今後、くりはらツーリズムネットワーク事務局として、会員のため、地域のために何かできるのか、精進していきたいと考えております。ご清聴ありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。2番目の発表者は、里山の食材を活用して地域の食文化を伝える、をテーマに、花山村塾の千葉優子さんに発表していただきます。

(花山村塾 千葉)

花山村塾の千葉優子と言います。今日は、この“らいん”に参加して、ということで、私が感じたことをお話ししたいと思います。

私がこの“らいん”に参加するきっかけとなったのは、陶芸教室を実施するその打ち合わせ会の場に私もおり、私だったら何ができるだろうかと思いました。花山に来てから35年になります。その間、いろいろなことに挑戦してきました。その中で一番はまったのが、こんにやく作りでした。始めた動機というのが、ちょっと現実的で、家族がみんなこんにやくが大好きだったこと、そのこんにやくがいつも台所に転がっている、だけどその購入代金が大きな額になる、家族にまたこんにやくかといわれるくらい



おなかいっぱい食べさせたい、そういう現実的な家計上から、私はこんにやく作りを始めました。その頃、私が所属している生活改善クラブでもこんにやく作りを奨励しており、こんにやくいもを買い、これが私のこんにやくの出発点であります。こんにやくいもを使ってこんにやくを作ったとき、本当においしく、いくらでも食べられました。その味、香り、しかも、1キロのこんにやくいもから山盛りのこんにやくができて、これはすごいと思い、それ以来ずっとこんにやくを作り続けています。

そういうわけで、“らいん”にやるのは、こんにやくしかないと思いました。早速、くりはらツーリズムネットワークの事務局の方にスタッフの皆さんに相談して、アドバイスを頂きながら、プログラムを組みました。こんにやくは普段の生活では主役ではないです、脇役です。それを主役と考え、作ることから食べることまでをお昼ご飯に合わせて設定し、こんにやくを食べながらみんなでこんにやくの話をするというプログラムを作りました。自宅を会場にしましたので、無理のない人数10人を定員としました。当日、事務局の方から渡された参加者名簿を見て、市内から8名、それ以外のところから2名の出席があり、私の願いどおりだと思いました。なるべく近くの方々に参加してもらい、こんにやくを加工するだけでなく、栽培方法や植えた種イモの保存方法、あるいは種イモの入手方法など、総合的に伝えたいと思ったからです。市内から8名、しかも文字や鶯沢や金成と比較的近いところからたくさんの方が参加してくれ、当日、ひとりふたりと集まり、プログラムが始まるまでの間、お話をしたり、始まる段取りを手伝ったりしてもらいながら、私は私の思い通りの展開になっていると、わくわくいたしました。というのも、みなさんとても意欲的で、始まる前から質問もたくさん出て、やる気満々でした。特別なハプニングも

なく、作業は順調に流れました。こんにゃくの作業の合間に寝かせる場面もあります。その間に、私が出している保存食と一緒に調理をしましたので、あっという間にこんにゃくが出来上がり、マイタケごはんも出来上がり、周りを固めるお煮付けも出来上がり、食卓を整えて、いよいよ会食となりました。こんにゃくもお刺身から串焼きからいろいろ味噌田楽、ということで、主役に据えられたと思います。それで会食が始まりました。いろいろな意見が出て、感想や質問がたくさん出て、あっという間にプログラムは終了となりました。それから皆さん帰られてから、私自身が一番楽しかったし、みなさんも楽しんでくれたということで、とてもいい気持ちになっておりました。そんなとき、隣にいた主人が、「ところで今日は何の講習会だったんだい」と聞きました。私は「え？」と思いながら、もちろんこんにゃく作りだよ、と答えたら、「そうか、俺はまた保存食の講習会かとおもった」と言われました。私はその時、言葉が出てきませんでした。とてもいい気持ちになったのが、スーッとさめていくのを感じました。始まりはこんにゃくでした。しかし、一口食べて試食してああおいしいと言いながら、次の言葉が、私が脇を固めた、保存食の話題でした。この保存食はなに？ どうして作るの？ どんなものが他に利用できるの？ という具合に、保存食の簡単な作り方、戻し方、利用の仕方、会食の中心はその保存食のことだけでした。私もそれに気持ちに乗ってしまって、もう保存食でとうとう盛り上がったまま、プログラムを終了してしまったということ、主人の言葉で思い出しました。

このことから私は一つ目として、プログラムは何か、テーマは何かをしっかりと自覚すること、二つ目として、そのテーマが決まったら、あれもこれもと欲張らずに、一つのテーマを深く掘り下げること、そして三つ目に何よりも自分が楽しく自信を持ってやれることをやることだという風を感じました。これはとても大きな反省点だったと思います。保存食を含めた郷土食、伝統食といったものを考えたときに、これは本来ならばそれぞれの家庭で受け継がれてきた暮らし方の伝承であります。そここのところをよく頭に置いて、私たちが昔からの知識とか知恵とかそういったものを、郷土の文化として次の世代に伝えていくことの大切さというものをこの“らいん”を通してもっと広くみんなに伝えていきたいと思えます。だから、今“らいん”に参加されている方ももちろん、これからもさらにもっと自分を深めて参加していこうと思っていると思えます。私ももちろんそうです。でもまだ参加していらっしゃらない方も、自分の持っているもので一緒に“らいん”に参加していきましょうという気持ちでいっぱいです。以上です。ありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。3番目の発表者は栗原の長屋門を通じて、地域の歴史と文化を伝える、をテーマに、くりはら磨き隊の菅原敏允さんに発表していただきます。

(くりはら磨き隊 菅原)

ご紹介いただきました菅原でございます。
今日は、長屋門についてお話をさせていただきたいと思います。実は長屋門は昔からあるもので、なんとなくあったものですから、非常に厄介もので、使わないとますます厄介なものだと思い調べてみる、盆地になっている栗原の中で栗原にたくさんある長屋門は珍しいものだということが分かりました。その中で盆地の地域を見たら、狭い盆地に36個、つまり10件に1件の割合であるという地域なわけです。長屋門というのは実はなんとなく厄介な、日も当たらないし困ったものだと思っていたときに、みなさんや宮口先生が来て、珍しい、これは素晴らしい素晴らしいと言うものですから、私も少し長屋門を考えて見ることにしました。そして長屋門の歴史をずっとたどってみました。そうすると、街道沿いで、古き良き時代の素晴らしい文化があったと言うことがやっとわかりました。奥羽州街道がありますけれども、これは一体どこに行くかという、文字を通過して、秋田を通過して、さがらを通過して、京都へ行く。これは全部昔文字のこの人たちは、こっちを通らないでそっちを通ったから、文字、ものじ、といったわけです。そして、文化の町にしたいと言うことでいまの文字になりましたけれども、このように非常に交通の盛んな場所で素晴らしい場所だったことがよくわかります。そしてそこには人馬の往来が激しいものですから人がたくさん来る。こういう歩くところに御番所を置きまして、花山も歩きましたから御番所があります。“らいん”では、この長屋門と奥州うごき街道と文化を伝える研修会に28名の参加がありました。長屋門ですが、非常に長屋門のあるうちは農業経営が盛んに行われた、いわゆる裕福なところだった。なぜ裕福だったのかというと、まず米の栽培をしました。そして経営ですから、雇い人を置きました。半分は作業場ということです。ですから、文字の長屋門のパンフレットもそのように作りました。愛藍人・文字というのは唯一文字で食事のできる場所です。できる場所です。そしてそこを出発してこの長屋門を見ました。これは非常に管理がよくて立派な長屋門です。このように、昔はこちらの方に門番をおいて、そして雇い人を置いて、こちらは作業所だったのですが、今でもこの家に住んでおります。長屋門には必ずこうして立派な蔵があるのです。なぜか。必ず米蔵はあるのですね。長屋門に蔵はそういう風に備わっています。



さきほども申し上げたように、この家の長屋門は大変立派に残っておりますし、この辺に炭の部屋にしておりますから、本当は外部から持ってきてこの辺の、釜男といひますけ

ど、みんなでこのくらいの参加、28名ここにおりますけれども、みんなで勉強しました。

伊達藩には3人の立派な家老がおりました。それで伊達藩は強くなったのです。

御番所は、大きさはそのまま屋根は茅葺を直しています。立派なものです。それから荒砥沢ダム。高さ100メートルありますけれども、このように崩落現場になっております。ところがこれは、学術的に非常に貴重な場所です。これは、残しておくべきであるということになりました。今までは危険な場所でしたから、危険だということで見学できなかったのですけれども、このように非常に大きな崩落現場があります。学術的にも非常に意味があるそうです。それで各地域、世界中から来ているようです。中でもダムのことをいろいろ説明してくださるのは、宮城県の職員の見学担当者の鈴木さんという方です。

このように、地域で長屋門を通じて歴史文化を学ぶということに意義がありました。参加者も長屋門の説明も感動した、地すべりも説明をよくしていただいてよくわかった。と喜んでいました。

個々の問題点は、これをいかに活用していくかをこれから真剣に考えていかねばならないと思います。さらに何回も地震にあっているので、長屋門もそれぞれに痛んでいます。その修復の費用が今後残していくために大変だということが課題として考えられます。もちろん、栗原の長屋門の条例もあって、勝手に壊さないように。実はもっともったあつたのですが、どんどん壊されています。収入が上がらないとみな壊すんです。非常に貴重なもので、利用すれば非常に立派な価値があるものであるということがわかります。ですから保存条例も作っていただければいいかなと。そして長屋門の価値を伝承するための人材育成、後継者をどう育成してどういう、率先してこれに参加してくれる方をどう集めるか、ということもこれからの私たちの大きな仕事であると思っています。以上で報告を終わります。

(司会)

ありがとうございました。4番目の発表者は、自然豊かな暮らしの中で、花山ならではの農業を体験、をテーマに、山菜茶屋ざらぼうを運営されている、伊藤廣司さんに発表していただきます。

(山菜茶屋ざらぼう 伊藤)

ご紹介いただきました花山の伊藤と申します。私の受け持ちは、くりはらツーリズムネットワークの一番下に書かれている、栗原市の連携事業の2点の中で、民泊というテーマです。私の場合は、外部から来た人間には必ず農山村の現実と魅力を伝えるということを考えておりますので、相手によっていろいろ変わりますが、そういう観点でプログラムを作っていました。今回は東日本大震災で被災した二つの南三陸町伊里前小学校の宿泊学習と、若者の地方体験交流事業、一般的には地域作り事業といわれていますが、この2点をご紹介したいと思います。

まず南三陸町伊里前小学校の宿泊学習は9月13～16、3泊4日で花山にやってまいりました。そのうち1泊を、6班に分けて農家に民泊するという事業でした。小学校5学年の25名が来ています。男子13名女子12名を6班に分けて、宿泊しました。1泊だけ、しかも半日ちょっとと、とても短い時間でしたので、非常に残念だったのですが、学校側の宿泊学習の狙いというのが下の部分です。非常にすばらしい、学校の先生方に敬意を表したいのですが、特に最後の食のあり方について考えること。これがすばらしく、この方向でいろいろ考えてやってみました。これは初日の対面式、11時です。子供さん方と6農家のみなさんとの対面式、これはそのあと花山にやってきたです。大きな荷物をしょってきました。ちょっと暑い日でしたので、休憩をして、昼食を食べた後、ちょっと裏山もだいぶ崩れましたので、まだそのままになっています。そこを見ながら散歩ときのご採りを兼ねていきましょうということになりました。熊も出るので子供たちに熊鈴もつけて行きました。

これは登っているところです。だいたい往復2時間弱のコースを行いました。これは一番上についたところです。陥没した手前です。ここで小休止。今年は残念ながらきのこは自然のものがなかなか出なくて、くりふせんだいを少し採ったくらいでした。

その後、薪割り体験ということで、最初に簡単な注意事項を与えて、後は自由にやらせました。うまくいった子供がなかなかできない子供にさらにアドバイスするという、お互いに話をしながら一生懸命薪割りをしました。すぐ割れるようにということで与えた薪は全部杉です。後ろにあるのはなかなか割れないので、割れるものでやってもらいました。かなり力強い割り方をした子供もいまして感心しました。



これはもう翌日です。初日の晩は、泊まった場所は中2階というか、屋根裏部屋みたいなところだったのですが、それなりに子供たちには好評で、隠れ家みたいなところに5人一緒に止まるということで、非常に楽しかったようです。最初に学校側から出していただいた資料には、子供たちは野菜嫌いであったのですが、自分たちで採った野菜を自分たちで処理して食べてもらったのですが、嫌いどころかたくさん食べてもらって、こっちもうれしかったです。朝食後すぐ分散していった子供たちが一堂に集まって、そば打ち体験ということで、こういう形でいろいろやってもらいまして、最後に子供たちが作ったそばをみんなと一緒にいただいて解散となりました。最後に皆さん花山でもう2泊ありましたので、そちらに皆さん行かれました。

我々の地区は子供が少ないので、特に私の行政区には子供が一人もいませんので、子供

が来たというだけで非常にぱっと明るくなった気持ちで、こちらも楽しく過ごさせていただきました。もっと長ければよかったという皆の感想でした。

若者の地方体験交流事業、地域づくりインターン事業、これは今回のシンポと同じ国土交通省の事業で、価値総研さんが事務局をしているものです。23年度については、これを受け入れる自治体が全国26、その中のひとつが栗原です。受け入れる目的はそれぞれの自治体で違うのですが、栗原市の場合は、これを受け入れる農作業や普段の暮らしの中の行事を体験しながら、交流するということで栗原ツーリズムの姿を研究します。こういう目的のようです。

来たのは9月27日から3泊4日、東京大学の大学院生が男子1名、当初2名だったのですが1名キャンセルとなりで残念でした。初日、市側のほうで、市内の資源調査ということで、栗原市内をいろいろ歩いて見学・視察をしました。夕方にはうちに來ましたので、まずは3年前の地震の映像を見せながら、現状説明をしました。次の日、ちょうど石釜を作り始めていたので、そのコンクリート打ちを手伝ってもらいました。その後、花山のぎつかまさんで、釜の見学とか仕上がった作品の石焼作業を手伝っていただいた。帰ってからもまた、薪割りも体験してもらいました。29日、農作業としては非常に悪い時期だったです。収穫するものもあまりない。それで、きのこを出荷するのを手伝っていただいて、その後山のほうの崩れたところを見学がてら、きのこ採りにいってまいりました。夜は地域の人たちとの交流会ということでした。最終日、朝、でもとまいたけの出荷の手伝いしてもらいまして、昼には関係者と昼食会、そして解散でした。次の日の朝一からコンクリート打ちをはじめました。コンクリートを練るのも初めてということだったので、非常に興味深そうにやっていました。それから薪割り体験。先ほどの子供たちの姿と比べてどうですか？子供たちのほうが非常に手馴れた感じでやっていたような気がするのですが、初めての体験みたいですね。やることすべて未知との遭遇というような感じでやっていました。また、ひらたけを採ってパックして出荷するという作業です。これはきのこ採りで山に連れて行って、山を見て木だ！といていましたから、どういう方かわかると思います。そういう方にいろいろこの山の魅力をちょっとでしただけどやってみました。その夜の交流会はいろんな方が集まり、一人一品持ち寄りでやりました。非常に楽しかったです。ご馳走が思ったより集まりまして、いい交流会になったと思います。

とにかく、できるだけ3大都市圏の若者を地方に、という事業ですので、まったく田舎経験がない方で、こういう機会を多く持って地方の生活をしてもらえればなと思います。

最後に今日のテーマにあわせて、観光産業というものが地域活性化にどういう風に結びついていくのかということを考えてみました。観光産業などたくさんあります。今回担当したのは民泊でしたので、その中のひとつに民泊がある。そのなかにもたくさんプログラムがあるわけですが、そのひとつとして、移住を希望している方だけを集めて民泊する体験というのが考えられると思います。

どんなことをやるか、ひとつは移住のプロセス、単純に手続き上の問題でなく、移住希望

者は若者から年寄りまでいますので、その方に合った、例えばどのように生活するのか、年金暮らしでいいのか。それとも若者だったら農家でもなくどうやって食べていくのか、その辺もあわせた研修会も必要だろう。また、いい時期だけでなく、真冬にやったり、いろんなことをまず体験してもらい、全部ひっくるめて移住したらやるんだよ、ということになると思います。こういうイベントをやって終わり、ではなく、参加した皆さんにいろいろ後々までフォローしていく、例えば、来て住まなくてもいろんな形でつながりができてくれればいいなと思います。

実際これにどういう風に地域活性化につなげていくか、市の大きな施策としてあるとすれば、その中の具体的な施策として、定住促進というものがあると思います。これをこの体験プログラムということに結びつけて今協働してやっていけばいいのかなと思います。中身としては、やはり専門部署の設置、事務部署として係にこういうのがあるということだけではなくて、本気でやるなら専用の職員をつけるぐらいのことでやればいいのかと思います。

それから、残念ながら今ここが空き家になっていて、これが家具でとか、ここの土地の売ってくれるとか言う情報がまったく集積されていけませんので、そういうものを集めて情報発信していくということがあればいいかと考えています。

それから、具体的に移住したいということが出てきたら、とことん行政として支援をしていく。こういう産業が広まっていく。これはたまたま観光産業と地域活性化の結びつきということですが、いろんな分野でこういうことができればもっといいのかなと、田舎には人一人来ただけで本当に地域が変わりますので、ぜひこういうことを考えていただければと思います。ありがとうございました。



2. 栗原市シンポジウム資料

地域の価値の再認識(学び)と人材の育成

2011.12.23 於栗原市
宮口侗迪(早稲田大学)

1. 自らの地域を語れるようになるろう

背景に日本という全体があり、それぞれの地域という個体がある

地域は相対的な存在、よって立つ基盤はさまざま→他の地域と比べてどんな特徴が

その特徴を学び価値に育てるのは人の力→自ら人材として育つべし

2. 本来の日本のすがたー全体としての日本ー

山々は樹木に覆われ、川には清流が→こんな美しい自然はない

暑い夏に水がある→多様なのち(作物も)が育つ風土

農村の典型→山(森)の下に家が並び、低地が水田になっている落ち着いた風景

人が蓄積してきたワザの美学→ほんによに彩られた東北の秋は何と美しいか

冬があるから美しい紅葉があることも知ろう

違う世界も知ろう→ヨーロッパの小麦畑は日本の田んぼの6~8分の1の土地生産性

土地生産性の低さ→食べるための家畜を増やす→山を牧草地に→山に木のない風景

土地生産性が高い→小規模経営でも生きられた→集落単位に支え合う強固な地域社会

農村の中には小都市が点在し、商業と職人のワザが蓄積→栗原にも多くの市街地が

都市は大きさに価値があったわけではない→賑わいとは人の接触→何かが生まれる

3. 系列化の時代にいかに生きるか

経済成長に続く流通・情報革命→距離・規模にかかわらず本部管理が可能に

系列化への対抗→遠くで管理されないものを育てて売りにするしかない

地域づくりとは今の時代に通用する価値づくり→身の丈に合ったツーリズムの育成

大きな都市ではつukれないどんな地域資源を持っているか→改めての学び

栗原では故麦屋さんがツーリズムのための学びをリード、その後栗原観光塾

4. 人と資源をどう育てるか

活性化しているとはいろんな反応が起きて何かが生まれやすい状態

人と人の反応→新しいプロジェクトの誕生、くりはらツーリズムネットワーク

人と資源の反応→農家民宿、長屋門カフェ、栗原長屋門研究会、その他の特産物

広い世間の様ざまな存在を知り、語り合い見せ合う中から育てる力が湧いてくる

アドバイザーの価値は相対的位置づけができること

5. 地域は単に客観的な存在ではない

ないないづくしでも、そこには人がいる→蛮勇をふるう力が何かをつくり出す

何の変哲もない→見る人が見れば違う価値が見える

人が力をつけるために背後から支える行政の支援は不可欠→栗原はやってきた

協働とは人と人が違う力を組み合わせて飛躍的な力にすること

6. 次の世代をどう育てるか

地域の価値を若者にどう学んでもらうか→高校との関係が重要

島根県海士町の隠岐島前高校と町のすばらしい施策

農山村の活性化のためのいくつかの基本的視点

早稲田大学教授 宮口侗迪

1. はじめに

地域には経済的価値のみがあるわけではない。都市にしる農山村にしろ、そこは様々な要素を持つ空間であり、人々が様々な生きるワザを駆使して日々の生活を送る場である。

経営の大規模化がかなり進んでいる一部の農村地域を除けば、一般の農山村地域は、それぞれが個別には経済的に大きな力を発揮しているわけではない。しかし多くの農山村地域は、極めて長い歳月にわたって都市とは違った形で国土を利用し、暮らしの場として、落ち着いた風格のある景観を形成してきた。特に中山間地域は国土のかなりの部分を占め、多く過疎化に悩みながらも、単純な効率化が困難な土地条件の下、地域コミュニティの人のつながりの中で多彩な暮らしのワザを受け継いできている。本稿では農村に対する大きな視野を提示し、さらにこのような地域の価値と、その活性化とはいかなることなのかを考えてみたい。

2. ヨーロッパで考えたことー大きな視野からー

果てしなく農地の続くヨーロッパ 筆者は今年度特別研究期間という制度で大学の授業をかなり免除されており、それを活用して、10月後半から11月初旬にかけて、フランスとベネルクス三国を鉄道でゆっくりと見て回る貴重な機会を得た。今までにも何度もヨーロッパの農村を訪れてはいるが、今回あらためて、南フランスから北フランス、そしてベネルクス三国の農村風景を見つめながら、いろいろ考えるところがあった。

もともと大学における地理学の講義では、日本の農村の特徴で何が際立っているのかを、ヨーロッパの農村と対比して説明することを続けてきており、このことは拙著でも強調している（『新・地域を活かす』原書房刊）。単純化して言うならば、我が国の農村は低地での稲作に全ての労力と知恵

を注ぎ、ヨーロッパの畑作とは比べ物にならない土地生産性をくり上げてきた。逆にヨーロッパでは食べるための家畜をひたすら殖やすことによって初めて、人口増に見合う食糧の供給が可能になったということである。なお、日本の水田がヨーロッパの小麦畑の6～8倍の価値があることを数値的に最初に指摘されたのは鯖田豊之『肉食の思想』（中公新書）である。

ヨーロッパを鉄道で移動しつつ目に入るのはほとんど農地である。相当大きな都市の駅を発車しても、10分もすると大きな牧草地が広がり、その中に小麦畑やとうもろこし畑が点在する。牧草地ではまばらに牛が草を食っており、場所によっては羊がいる。そして全体として荒廃した土地はほとんどなく、きちんと農業が営まれていることが分かる。フランスが農業大国であることや、オランダが偉大な締切堤防をつくって海面下の土地に農地を広げたことは著名であるが、ルクセンブルクのような小さな国でも、都市を少し離れば延々と農地が広がる。ヨーロッパはひたすら農業大国なのである。今回は訪れなかった工業国ドイツにおいても、移動中に目立つのは農地であって、工場ではない。

一方でヨーロッパはギリシャ・ローマの昔から世界に冠たる都市文化を育ててきた。都市は食糧



南フランスのどこまでも続く農地と木立に囲まれた農家

をつくらない人が群れて住む場であり、それはかつては農村からの取奪の上に成立した。都市と農村の間には支配被支配の関係があったのである。しかし今のヨーロッパではそうではなく、かなり健全な形で都市と農村の役割分担が成立していると言える。

EUの徹底した農村支援 そして我々は、ヨーロッパの農村が美しく健全に保たれている背景に、EEC（ヨーロッパ経済共同体）結成以来の農業の保護政策があることを忘れてはならない。現在加盟国27カ国にまで拡大したEU（ヨーロッパ連合）は、フランス・ドイツ・イタリア・ベネルクス三国の6カ国で結成されたEECに始まるが、その当初から、共通農業政策はその大きな柱であった。これは単純化して言えば、域内の余剰農産物は全て一定の価格で買い上げることが基本で、これが存在する限り、農家は安心して農業を営むことができたのである。

そのような保護の中で、当然ながら農業に意欲を持つ人々が育ち、規模拡大を進めたり、別の農場を買い取って移り住むということが緩やかに展開してきた。筆者がかつて訪ねたフランス南部の農家は、70haの有機栽培の牧草地で僅か32頭の乳牛の飼育を行う専業農家であったが、自分の代で、望ましい農業経営が可能なこの農地を購入して移ってきたのだという話であった。ここでは村の共同加工場で名産のチーズをつくっており、この仕組みが少敷飼育の専業酪農経営を可能にしていた。

その後の加盟国の拡大の中で、共通農業政策は直接支払いを含む所得支持政策に向かうなど複雑化しているようであるが、かつてはEUの予算の7～8割が農業対策に向けられた年もあったというから、ヨーロッパ諸国がいかに農業・農村を大切にしてきたか、そして大枠としてその中で農業の健全な展開が進められてきたのだということが理解されると思う。なお、山村などの条件不利地域についてはさらなるプロジェクトがつくられ、農家民宿への補助なども行われている。

3. 後継者難の時代に新しい農業・農村への支援策を一国レベルで必要なこと

ぶれない農政を ひるがえって我が国の農業政策を見ると、かつて「猫の目農政」と言われたように、そこにぶれない磐石の思想が感じられない。急峻な山が国土のほぼ7割を占め、「今は山中、今は浜・・・」と地形の変化が歌われる我が国では、その狭い耕作可能地に生産力の高い水田を

造成し、小規模経営でありながら食糧の供給を何とか可能にしてきた長い歩みがある。そしていわゆる高度成長期に、農村の変化は一般に兼業化という形で進行した。多くの農家が農家であることをやめることなく、兼業に従事したのである。そして望ましい兼業機会の少ない、都市から遠い山村から若者がいなくなった。そして経済成長による勤労所得の上昇に加えて、兼業化の進展とともに一般農家の所得水準も上がり、1億総中流などという言葉も生まれた。

北海道のように、農村が全体として兼業化ではなく、離農する農家と、その農地を購入して経営規模を拡大する農家に分かれていった例外的地域もないわけではない。その結果北海道では50haという経営規模も珍しくなく、言わば経済活動としての農業が成立しているといつてよい。北海道のみでこのような変化が起きたことには、より良い状態を求めて変化することをいとわない移住者の性格が反映している。北海道の農村のほとんどが過疎地域に指定されている背景には、このような変化の中で、多くの農家が家ごと離村していったことがある。ただ、詳しい人の指摘によると、売りに出た農地が以前ほど買い手がなくなってきたおり、全体として農業への意欲が少し沈滞気味なのではないかと言う。

いまこそ農業への意欲の醸成を そして土地条件に比較的恵まれた地域で、野菜栽培や果樹栽培に特化した主業農家が存在する地域も少なからずある。しかしそれらの農家が、後継者をも含めて押しなべて意欲に満ちている状況にはないと、残念ながら言わねばならない。様々な政策の変化や複雑化の中で、農業の将来に対する不安が常につきまとっているのが実情である。自然を相手にする農業は、決して市場原理のみで成り立つものではなく、食糧の大部分をますます複雑化する国際関係に委ねることは安易にあってはならない。しかも我が国は夏に水があるという点で、極めて農という営みに向いた風土を持っている。牧草地にしかならない土地が多くを占めるスイスが我が国よりもはるかに大きな自給率を実現していることは、はっきりとその国の姿勢に由来する。まず国は、主業農家が意欲を持って農業が続けられるよう、単純な形の融資などを含む明快な施策を展開すべきである。農村の再生・活性化には、何よりもまず、国のぶれない農業政策が背後に存在することが不可欠である。

かつて兼業化が大きく展開したのは、農家が農家であることをやめなかったからである。しかし

それから数10年が経過し、次の世代は、勤務先を持ちながらの営農意欲を必ずしも持たなくなった。そしてその中で集落営農や借地農業的な法人経営が、なんとか農地を守ってきた。しかし集落営農は、10年20年と年を経るごとにその担い手の年齢が上がり、スムーズな世代交代の展開が難しい。集落営農がいわゆる総兼業化のあとの高齢化の時代を支えた価値は評価しなければならないが、そろそろ曲がり角を迎えているという認識が必要であろう。耕作放棄地が着実に増えている今、全体としては主業農家の意欲を喚起し、農地がそこに集約されていくような思い切った政策を打ち出すべき時に来ていると考える。

ただ、一般企業の農業への参入は慎重であるべきと考える。主業農家は農業をやめれば食えなくなるが、余力のある企業は撤退してもつぶれるわけではない。農地は価値を生み出す国土であり、それがいい形で使われ続けることこそ肝要であるからである。

4. 中山間地域における内発的活性化について—地域からの視点—

内発的な取組の重要性 一方で、山地が多くを占める我が国の基本的特性から、中山間地域は極めて広大な面積を占め、それらの多くは、経営規模の小さな農家から構成されている。そしてこれらの地域では多く高齢化が進展し、手仕事の農業が継承されているものの、耕作放棄地も着実に増えている。これらの多くは過疎地域であり、その再生あるいは活性化は、もはや半世紀に及ぶ重要課題となってきた。

中山間地域の農山村は、その形状、土地条件、人的構成等において大げさに言えば千差万別である。したがって前述した国の農業に対する全体的な支援は不可欠であるとしても、そのような地域の活性化は国の画一的な支援策のみではできない。それに加えて、その内実を踏まえた、中からの内発的な工夫と意欲ある取組が求められる。

我が国の山々が樹木に覆われているのは、低地の水田農業にはほとんどの工夫と労力を注ぎ込んで、極めて高い生産力を持つ水田農業を完成させた結果、山を食糧生産の場として使う必要がなかったからである。前述したヨーロッパは、水田に対して小麦畑の生産力が劣ったために、牧草地を増やし、食べるための家畜を殖やす努力を重ねてきた。その結果、山の斜面そのものが牧草地として使われる風景がかなり広がり、言うなれば山

らしい山が余りない。

それに対して我が国の山ふところに抱かれ、棚田を含む水田を持つ農山村のたたずまいは本当に美しく、訪れる人に大きな安らぎを与えてくれる。このような中山間地域においては、単純な意味での生産力がそう大きくないことを気にすることなく、今までの蓄積の上に、都市にはない価値を持つ地域として、都市の人にその価値を分けてあげよう。都市の人を受け入れるツーリズム的な取組を進めることが重要であろう。



収穫後の稲の杭掛け（ほんによ）の美しい風景
(宮城県栗原市)

鳴子の米プロジェクト もともと温泉町として名高い宮城県の旧鳴子町（現大崎市）では、パブル崩壊以後の現状を憂う旅館主や農家、それに行政職員も加わって、鳴子ツーリズム研究会が発足し、2004年にグリーンツーリズムの全国大会を鳴子で開催した。そしてこの間に関係者間で多くの実のある議論が交わされ、様々な得意技を持つ地域の人的資源が発掘された。研究会のメンバーには、旅館主や観光協会の関係者のみならず、農家、手仕事の職人、奥地集落の代表などが加わり、協働の見本のような会が出来上がった。少し背伸びをして大きな大会の開催を引き受けたことが、地域に内在する力を発掘し、それを組み合わせる力を発揮するいい方向をつくり出したと言える。ここから農家と旅館の協働による「田植え湯治」、どぶろく特区での農家レストランの開業などが生まれた。

次に地域で問題になったのは、米の価格が下がる中で、特に効率化できない中山間地域の農業を守るにはどうしたらいいかということであった。今や農村の存在価値を唱える旗頭として活躍しておられる結城登美雄氏のアドバイスの下「鳴子の

米プロジェクト」が発足し、農家の手取りが米1俵18,000千円になる仕組みを目指すことになった。そして県の農業試験場で開発された高冷地向けでおいしい品種を採用、奥地集落の3戸の30aで栽培がささやかに始まったが、その品種はその後「ゆきむすび」と命名され、5年が経過した今は、38戸の農家による15haの栽培にまで成長している。

収穫された米はプロジェクトによる直接販売で、地元の温泉旅館を始め、プロジェクトに関心を持つ都会人に購入され、完売してきた。田植えや稲刈りには、外部から多くの人が参加し、そのあとの会で絆を深める。大震災以後、絆やつながりという言葉が飛び交うようになったが、土地条件の厳しい中山間地域においては、内発的な取組に外部の人を巻き込んで、自ら強い絆をつくろうとする取組が大きな効果を発揮する。単純な発想では農業が業として成り立つことは難しい。鳴子では、大げさに言えば、外部の人との新しい絆をつくることによって山間部の農業が甦ったと言える。関係者はその後平野部に土日営業の「むすびや」という〈おむすび食堂〉を開店するまでになった。鳴子の発展はまさにツーリズムに始まり、ツーリズムの上に展開しているという感がある。

5. あらためて農山村の活性化を考える

活性化は交流から 農山村の集落を基盤にした地域社会は、今もってなお生活のよりどころであり、住民の帰属意識は強い。そもそも経済成長期以降兼業化が急速に進行したのは、農地を手放すことの回避とともに、自らが身を置く場を変えないという強い意志のあらわれであった。そして過疎化・高齢化の進んだ山村集落においても、気心の知れた顔ぶれで穏やかに日常を送る価値はもちろん消えたわけではない。

しかしこれからも地域が受け継がれる方向をつくり出すためには、新たな工夫が不可欠である。筆者は、活性化するとは、化学的に活性度の高い、すなわち化学反応が起きやすい状態をつくることだと唱えてきた。人と人の間に反応が起きれば新しい組織が生まれる。人とモノの間に反応が起きれば特産品が生まれるなどというのが分かりやすい例である。そのように様々な反応が起きるためには、いろんな新しい接触がなければならないのは当然である。しかし、高齢化が進んだ中山間地域等においては、そのような新しい接触は起こり

にくい。新しい接触を起こすためには外部の人と接触するかしかなないわけで、地域の活性化は交流からと叫ばれてきたのは、まさにこの理由による。

したがって地域の戦略としてツーリズムを考えることは、単にお金を落としてもらう以上の意味がある。前述の鳴子は、奥地集落の農家と温泉旅館、さらに行政職員と外部の有識者の接触がツーリズムというコンセプトの下で大きな反応を起こしたわけで、その結果集落を超える新しい組織が生まれ、農家の所得の上昇につながるというすばらしい結果を引き起こしたのである。

農山村の魅力と人を受け入れる意義 水田農業に特化した純平野の農村はさておき、少し山へ入れば農山村の地域社会は元来単純なものではない。そこには様々なワザを持った人が住み、小規模な水田や畑作に加えて、山菜の採取、鳥獣の捕獲など、多彩な生業があった。このような人の営みはリアルに見えるものであり、そのような地域社会は、高齢化が進んでいるとはいえ、都市にはない多くの魅力を持っている。これを例えば金銭的に単純に換算した生産力のみで理解することは間違いである。これらの生きるワザは、むしろ都市ではあり得ない貴重な宝物なのである。これらの宝物を分けてあげるのがまさにツーリズムであり、その仕組みをつくる努力を重ねることによって地域にいろんな新しい関係が生まれる。これが地域の成長であり、まさに活性化なのである。

平成21年度に、文科省・農水省・総務省の三省共同プロジェクトとして、「子ども農山漁村交流プロジェクト」が発足し、そこで全国の小学5年生に農山漁村体験をさせることが提案された。筆者はもともと各地で、農家に滞在した子どもたちがいかにかいい方向に変わるかという実態を見聞きしていた。そして子どもたちを受け入れるために受け入れ地域で新しいやり取りが生まれ、まさにそこに様々な反応が起きることが地域を活性化させると考えてきたので、このプロジェクトをもう手を挙げて支持した。国の将来を託す子どもたちにも、受け手となる農山漁村の側にも新しい価値と成長を生むすばらしい事業だと考える。しかし政権交代後の事業仕分けで文科省の子どもの移動費用に充てる予算が削られ、相当縮小した運営になっている。残念でならない。

農山漁村に大きな教育力があることは既に様々な研究で明らかになっており、人を受け入れることによって地域が活性化することもまた明らかである。是非この事業の意義を、政治の舞台上で本格的に議論し直してもらいたいものである。

る学びが必要である。わが国は少し高いところで同じになろうとする向上心から発展を遂げてきた長い歴史がある。かつては水田化の長い歩みがそれであり、高度成長期以降は都市化がそれに取って代わった。しかし全体人口が減少局面に入り、拡大成長が限界に達してすでに年月が経過した今、違う存在から学ぶことによって、さらに違いを際立たせ、自らの個性を主張することが、地域戦略としては大切なはずである。

多様な地域の存在を前提とする地理学を専攻してきた筆者は、いろいろな地域が格差の中にあるのではなく、それぞれが違った価値を持つ存在であることが国としても健全な姿であると考えてきた。本稿の議論もそのことが出発点にある。筆者は現在、期限切れを控えた過疎法のあり方を議論する総務省の過疎問題懇談会の座長と、コンパクトなまちづくりを強力に進めている富山市の都市計画審議会長を務めさせていただいているが、このような対極にある地域の価値を考える機会を多く与えられていることは、地理学者として極めて幸せなことであり、このめぐり合わせに深く感謝したい。

(みやぐち・としみち)

都市化と経済成長の中で消えていった、都市の対極にある価値ではないだろうか。

拡大した郊外の住宅地と大規模効率化が可能な平野農村は、まさに機械文明の象徴であり、そこにはかなりの画一性を感じざるを得ない。しかし都市が、多くの人が行き交う場を再生することができれば、そこは人間的な会話のあふれる場となり、そこからは必ず個性が生まれる。一方で、都市化とは無縁であった過疎地域には、自然と農をベースにした人の営みのワザが、風格ある風景と共に継承されており、これはまさに、都市では育てることのできない価値である。

極論すれば、わが国の都市化の進行によって失われたものは、多くの人が行き交う市街地と農村それぞれに蓄積された人のワザであるということになる。そしてこの二つは、人がつくってきた価値として対極にあると言えるだろう。都市の側は、コンパクトなまちづくりによってその価値の復活をめざすべきだし、一方、農に根ざす人のワザが残る過疎地域においては、ツーリズムを念頭に置いて、そのワザが何とか継承されるよう、手だてを尽くすべきであろう。

かつて農村の人が時に都市を訪れてその価値に触れたように、都市の人が農山村を訪れて、その風景と食、さらには人の温かさに触れる旅が増えてきたことは、都市化が進み都市人口が大多数を占めるようになった今、都市では育たないものにあらためて目が行く時代になってきたことを感じさせる。このような動きがますます活発になり、地方都市の中心市街地と過疎地域がそれぞれ対極の存在価値を發揮することを願うものである。

その場の特性を活かして価値をつくり出すのは人であり、人は皆同じではない。それぞれの場が活力を發揮するには、その場に向けた人が力を發揮する必要がある。そして人がさらに力を發揮するにはさらな

年層が都市に向かい、急激な人口減少が発声した。過疎地域の誕生である。その後もその状況は持続し、近年では極度の高齢化も進行している地域が多く見られる。

かつての地方都市は凝縮感ある市街地に多くの人が行き来し、商業者と消費者の間の多くの会話が活力と相互刺激を生み出していた。しかし、マイカーとショッピングセンターとの関係は、人間的な関わりを欠く、お金ともののやりとりすぎないように感じる。

三 凝縮された市街地と過疎地域 — 対極の価値 —

都市の価値は、見知らぬ多くの人が行き来し、その間に相互刺激があるところにあると、筆者は長く考えてきた。新しい時代の風をつくり出すのも都市であり、価値なきものが淘汰される一方で、万古不易なものを残しているのも都市である。しかし拡大分散型の都市化と中心部の空洞化によって、都市本来の価値が失われ、いわば農村でも都市でもない空間が大量に出現した。したがっていま地方都市がめざすべきことは、必ずしもお金を使わなくてもそこに身を置いていだけで価値を感じる、本来的に都市らしい場の育成である。コンパクトなまちづくりの意義はここにこそあると思う。

一方、中心都市から遠く離れていることによって経済成長から取り残され、人口減少と高齢化が極度に進んだ過疎地域は、まさに都市化とは無縁であっただけに、そこにはまだまだ自然の中に織り成す風格のある風景が残されている。ここでは棚田の耕作や野菜の栽培、民具の加工など、多くの手仕事が進められて生活がつくられてきた。元氣な六〇〜七〇歳代の方たちによってそのワザはいまなお継承されており、作業のためにまさに体が自然に動く姿がそこにある。これこそがかつて農村では当たり前存在し、

かれた。農産物を出荷し、嫁入り道具を町まで買いに行くことに象徴される小都市と農村の身近な需給関係がそこにあり、それがまた双方の手仕事を育てたのである。そして総体としての小都市の経済力は、日常の習い事やさまざまな催しを生み、さらに絢爛豪華な山車や洗練された歌舞音曲を伴う祭りをも育て、今も各地に貴重な小都市文化として継承されている。これはまさに都市の経済の力が生み出したものであり、農村では生まれにくいものであった。

しかし一九六〇年代からのわが国経済の高度成長は、都市と農村それぞれを大きく様変わりさせた。大都市の市街地は激しく拡大し、郊外に大量の住宅地が供給された。別格の拡大を見せた東京では、デパートなどが立地して副々都心と呼ばれるような郊外の中心地すら出現し、公共交通の更なる展開とあいまって、スプロールのに始まった市街地の拡大もそれなりに成熟の様相を見せている。

一方地方では、県庁所在地ないしはそれに準ずる都市の二〇～三〇分圏に多くの住宅団地が開発され、農地と住宅団地が混在する、過去とは異なった田園風景が出現した。これらの開発はモータリゼーションの更なる進展を促し、郊外スーパーやショッピングセンターという大型店の立地をもたらししたが、中心市街地の空洞化と農家の兼業化の進行と重なったこれらの流れは、地方都市の生活と都市に比較的近い農村地域の生活パターンを極めて類似したものにしていった。そしてこれらの圏域の中には、いわゆる平成の大合併の中で、中心都市に合併したケースがかなり上る。

そしてこの流れの中で、地方の小都市の商業は衰退し、後にシャッター商店街と呼ばれるようになっていった。県庁所在地クラスの都市でも、その中にそれに近い商店街を見ることができるとは、

この間、中心都市から遠距離にある山村や離島では、現代的な所得を得る雇用機会が少ないことから若

市の発生には農業生産の飛躍的な発展が前提としてあったということである。都市は、食糧生産に従事しない人が群れて住む場であり、政治権力などの何らかの力が農村から食糧を集めて、直接間接の分配が行われるシステムである。農業生産の向上によって食糧をつくる人たちの間に余剰が生じなければ都市は生まれぬ。

もちろん、食糧供給という点で都市が自立できないという理解は多くの人にあるであろう。しかし都市文明の発生の前提に農業生産の飛躍的な発展があったという歴史的事実を、もっと強く認識していただきたいと思う。

二 わが国の都市と農村の歩み

江戸時代の幕藩体制の中で、各藩はこぞって新田開発を進め、そこではかなりの農業生産の発展があった。その中で城下町という権力に直結する都市に加えて、各地に農産物の集散地としての小都市が多く誕生した。また、参勤交代すなわち大名行列は、いわば地方政府が大きな消費を伴う移動を強制された他に例を見ない制度であり、ここから宿場町の繁栄が生まれた。

そのようにして生まれた多くの都市は凝縮された市街地を持ち、農村とはまったく異質の空間であった。農村は一子相続的に受け継がれ、農村からはみ出た人が都市に流入することによって明治以降も都市の人口はじわじわと増え、いわば都市がゆっくりと成長し、農村がそのまま継承される時代が長く続いた。

地方の小都市は農産物の集散地であるのみならず、農作業や生活に必要な道具などのさまざまな商品が供給され、さらにはその品々を製造する職人の住む場でもあった。そこでは多種多様な手仕事のワザが磨

論壇



都市と過疎地域

— 対極それぞれの価値を求めて —

早稲田大学教育・総合科学学術院長

宮口 侗 廸

一 都市という場の出現

地表は極めて多様である。もともと凹凸があり、緯度による太陽熱の供給の度合い、さらには大気の動きによる降水の有無によって、密林から砂漠まで、長い時間をかけて自然の多様性が形成されてきた。そしてさらに、人類はその上に更なる多様性を上乘せしてきた。それぞれの自然に適した農業を編み出したばかりではなく、さらには都市という場を出現させてきた。

人類が都市を出現させたことは、かつて人類の歴史の中で最大のエポックとされ、われわれが四大文明として理解している古代文明の誕生とは、まさに都市の出現を意味した。そして今や都市人口の比率は増え続け、わが国では実質八割を超える人が市街地に生活しているとみられる時代になった。

このような都市化の進展の中で、多くの人に忘れられている重要な事実があるように思う。それは、都

以上の定住となって現れているのである。

この背景には、農山村の暮らしが、本質的にはゆとりあるものであることがある。筆者の大学のゼミでは、青森県の旧相馬村の農家に学生を数日泊めてもらうようになって今年で19年目になるが、農家の方たちは、1人2人のご飯はどうにでもなると言ってくださる。そして、都会にあふれる過剰な物資の代わりに、田舎には暖かいつきあいと会話がある。他人が入ることによって、新鮮な会話と手助けが生まれることが、まさに地域社会の活性化をつくり出すのである。

この間農水省では「田舎で働き隊」、総務省では「地域おこし協力隊」など、1年〜3年の長期滞在が可能な事業がつくられ、長期滞在中で地域の中のさまざまな循環に身を委ねる手立てが相当整えられてきた。都会暮らしに少しも疑問を持つ人に、田舎の持つ内部循環の力に身を委ねてみることを強くすすめたい。

【参考文献】

- ◎ 宮口著(2007)『新・地域を活かす』原書房(特に第5章 交流論)
- ◎ 編集委員会編(2010)『緑のふるさと協力隊―農山村再生・若者白書2010―』農文協
- ◎ 宮口ほか編著(2010)『若者と地域をつくる』原書房

現代地方自治論

関西大学政策創造学部教授 編著 橋本行史

●自治体は、どのようになっているのか？

◎地方分権、NPM、市民参加

◎転換期にある地方自治のキーワードを年頭、制度と政策が連携する重要性を読み解いていく。

【はじめに】より

市民は、新しい市民社会において、これまでのように国家や地方自治体という統治機構にただしたがう客体としてだけでなく、統治に参加して、日常生活に関わることを主体的に決定する存在として捉えなおされている。

地方自治論が、市民や学生が自らの暮らしに主体的に関わっていくための方法を学ぶという、有意義で極めて興味深い学問分野であることを理解することができる。

また、地方分権改革の推進とともに、地方自治において新たに効率性やより進んだ市民参加が求められている。このような中で、地方自治論においても、理念と制度、制度と政策の密接な連携を考えていくことが不可欠になっている。

(中略)

本書が、多くの学生に支持される面白くてわかりやすい地方自治論の講義テキストとなることを期待している。もちろん、学生だけでなく、一般の読者においても、身近な生活を充実させるためのツールとして、あるいは、公務員試験や各種の資格試験のテキストとして活用されることを願っている。

【主要目次】抜粋
はじめに

第1部 歴史

第1章 地方自治とは何か

第2章 地方自治の歴史

第3章 地方分権改革

第II部 マネジメント

第4章 NPM(新公共経営)

第5章 政策

第6章 財政と会計

第III部 ガバナンス

第7章 市民参加

第8章 機関

第9章 監査

第IV部 自治のカたち

第10章 種類と規模

第11章 国と地方・地方間の関係

◆ 体裁 A5判・270ページ

◆ 定価 2800円+税

◆ 発行所 ミネルヴァ書房

〒607-8494

京都市山科区日ノ岡堤谷町1

電話 075-55815191



受入れ体験によって農家が自信をつけ、積極的に受入れに応じるようになったことが報告されている。このことも交流によって成長が生まれることを如実に示している。

3 滞在型交流から イターンへ

前述したように、地域に入ってくる他人と交流することは、短期滞在であっても、地域に大きな影響をもたらす。特に地域の側が入ってくる他人を、地域のエネルギーが生まれやすくなる形で扱うことができれば、地域に新しい組織ができたり、新しいビジネスが生まれやすくなる。そうであれば、イターン者が地域にとって新たな活力をもたらすきっかけになることは理の当然である。

イターン者は地域にもともと暮らす人と極めて違った存在である。何らかのきっかけでその地域を知り、それまでの生活を捨ててその地に移り住む。そこには相対的な地域の価値の見極めがある。地域にずっと暮らす人は、必ずしも他の地域と対比してその地域の価値を考えているわけではない。もちろんすべてがそうではないが、多くの人はその地域の何がいいかをきちんと整理しているわけではない。

極めて特別なケースを除けば、ある地域に

移り住むにはその地域を知ることが前提となる。地域を知るには地域に暮らすことが一番である。そして暮らしていれば、地域の異分子として、まさに地域の人々との交流を重ねることになる。前述したイターン事業も、役所の方ではUJイターンを促進することに役立つという期待から生まれた。ただ、学生時代の短い滞在が、その場所への移住に直接つながったケースはあまりない。しかしその刺激から、ふるさとへのUターンや、卒業してから農村と関わる仕事に就くという形は、結構生まれている。

地域に若者を派遣し、地域に暮らす中でその地域へのイターン者を多く生み出しているのは、何と言ってもNPO法人地球緑化センターの「緑のふるさと協力隊」事業である。この事業は全国から若者と受入れ市町村を公募し、丁寧な面接とマッチングを行った上で1年間それぞれの地域で生活するというものである。生活費月額5万円が支給されるものの、地元のスケジュールにしたがって、ボランティア的にさまざまな作業に従事する仕組みである。今年で17年目を迎え、この春終了した16期までに465人の若者が参加し、そのうち4割以上の若者が派遣市町村に定住している。すばらしい事業といわねばならない。

高度成長期と異なり、国内における職場は縮小傾向にある。都市ですべての人が職を得られる時代は終わった。この時代、少しでも田舎で土地を直接使う暮らしに関心があれば、そこに身を委ねることによって、都市では想像もつかない毎日の暮らしがあることがわかる。農山村の内部では、外部に商品として出て行かない物資や人のパワーが循環している。余った野菜を誰かにあげたり、時間の余裕のあるときにちよつとしたお手伝いをすることは日常茶飯事である。この点が重要であり、特に過疎・高齢化が進んで年月が経過したいま、さまざまな学びからそのような支え合いが以前よりも意識的に行われるようになったと、筆者は見ている。

若者が地域に入り、5万円で自炊生活をしていることがわかれば、その人を何とか面倒見てやろうと、地域にいろいろな反応が生じる。「玄関の鍵を明けときなさいね」といわれて家に帰ると米と野菜がおいてあったというような報告は、枚挙に暇がない。地域の中の物資と人のパワーの循環の中に入ることができれば、5万円で十分生活できるのである。そしてそのような関係が、定住できる仕事を見つけてくれる人が現れたり、本人が小さなビジネスをつくったりすることにつながっていく。その結果が、結婚等も含めて4割



近年、農山漁村の「教育力」が注目されるようになった（写真は体験農業で田植えをする子どもたち）（写真：共同通信社）

まな仕組みに対して専門的にコメントしたり、実際の作業にかかわったりしてくれらることに期待する向きもあろう。もちろんこれらの期待は間違っていない。実際にホームベージの更新等で地域に貢献した学生は少なからずいる。

しかし筆者はそれに加えて、学生を受け入れることが地元の人の成長を喚起し、それが地域の活性化につながると考え、このインターン派遣事業では、学生の預かり方を地域で工夫していただくよう、強くお願いしてき

た。単に宿泊施設に泊めて決まった作業をさせるのではなく、滞在中は学生の金銭的負担ができるだけないように、そして多くの地元の人と学生が接することができるようなプログラムを考えていただいたが、それは、学生の預かり方について、今まで地域になかったような話し合いが生まれることに大きな意味があると考えたからである。

伝統的な地域社会、特に人口減少が続く過疎的な地域では、新しい試みのための話し合いを重ねることはなかなか難しい。しかしインターンで入ってくる学生のために、誰がどんな役割を果たせばいいかという話し合いは、内輪の利害が絡む問題に比べて、素直に進められるのではないだろうか。地域に貢献したいと思う人はたくさんいても、何をすればいいのかが見えなくてこない。他人が入ることによってそれが見えてくることに大きな価値がある。

そして、まだまだ未熟な学生に対して、手仕事による農業や伝統芸能を始めとする培われたワザを示して学生を感動させることは、自分たちの持っているパワーを再認識することであり、そこに勢いが生じること必然である。これをきっかけに消えようとしていた伝統芸能が復活したり、丁寧な農作業の美学が再生したりする可能性は十分にある。学生に

ワザを見せることによって勢いが生まれることが、まさに先に述べた社会論的活性化である。学生のためにいろいろ算段する中で、行政職員とさまざまな得意技を持つ地元住民との協働も生まれやすく、これがうまく絡めば経済的活性化につながる可能性が大いにある。

また近年、農山漁村の「教育力」が注目されるようになった。一昨年、文科省・農水省・総務省の3省合同プロジェクトとして、「こども農山漁村交流プロジェクト」が発足、5年後には全国の小学5年生を全員農山漁村で宿泊させる方向を決めた。

政権交代後の予算措置が必ずしも順調に進んでいないようではあるが、この事業は、農家民宿や農村でのホームステイがいかにかもたちがいい影響を与えるかが、個別の事例の蓄積によって明らかになってきたことを踏まえて生まれたものである。そして農山漁村の側も、こどもたちの面倒を見ること、すなわち「教育力」を発揮する中で新しい役割を見つけられれば、そこからいろいろな反応が生まれ、まさに活性化を実現することができると。ぜひ全国的に進めてもらいたい事業である。

多数の小中学生を受け入れるためにはそれなりの宿泊先の確保が必要であるが、いくつかの地域では、地域づくりインターンの学生の

つながる。この点を考えても、人口減少・高齢化に悩む多くの地方社会においては、経済的側面ばかりを近視眼的に追い求めず、社会的活性化を重要視すべきである。

2 交流と地域の活性化— イベント型から滞在型へ—

絶えず成長を続ける都市社会は別として、人口減少と高齢化に悩む地方社会においては、人の顔ぶれが固定し、人と人の間に新しい反応が起こりにくい。そのような地域に新しい反応を起こすために、筆者は早くから交流の重要性を唱えてきた。

交流とは違った系統の人と付き合うことであり、何年も顔なじみの人と付き合うことではない。わが国の地方社会は、人口減少の流れの中で、多く決まった顔ぶれで推移してきた。そこでは「話せばわかる関係」どころか、「話さなくてもわかる」関係が珍重されてきた。お互いに多くの共通認識を持つていれば、極めて短いやりとりで意思を伝えることができる。しかしそのようなやりとりの中では、お互いに新しい発想をもたらすような刺激や影響は生まれない。

しかし共通認識を持たない人との間で意思の疎通を図るには、比較にならないほど多くのやりとりが必要である。説明の順序も大切

になる。かつて農山村の側で都市に対して多くの都市農村交流事業が企画されたが、このことをしっかり認識してその矢面に立った行政職員や実行委員は、おそらく大きく成長したはずである。それは、わかり合う関係ではないことを前提に、違う世界で生きている人に地域の価値を伝える準備作業を行い、そして結果として都市の人からの反応と指摘に学ぶからに他ならない。

また、いい形で農山村に触れてもらうことができれば、訪れた都市の人たちも、都市ではつくることのできない農山村の持つ価値に刺激を受け、農山村そしてそこに生きる人を過去とは違う肯定的な目で見るようになる。すなわち交流は相互刺激を生み、お互いの成長を喚起する。これが筆者の唱えてきた交流論である。

交流イベントにしても、単なるお金とモノのやりとりは、それがいかに割得であっても、必ずしも人と人のいい関係をつくることに発展しない。都市の人が、安全でおいしい野菜がどのようにつくられるかを農家から直接聞いたり、郷土芸能の出演者と親しく語り合ったりするような接点が用意されていれば、それらは都市では触れられないワザとして敬意の対象になり、都市の人の視野を広げることになる。また、準備されたプログラムやアイテ

ムのうち何を高く評価したかを語ってもらったり、批判的指摘を受ければ、地元の人が、自分たちの存在価値がどこにあるのかを、他人の目を通して見極めることができる。まさに交流がお互いの成長を喚起するのである。

交流を重視する流れの中で、滞在型の交流を図る動きが生まれてきた。筆者がかかわったものとしては、残念ながら事業としては打ち切られてしまったが、旧国土庁時代から一昨年まで国土交通省で、地域づくりインターンの派遣事業が実施されてきた。これは大都市の学生を夏に数週間地方で預かってもらい、その間にさまざまな地域活動や作業を体験してもらった。

ももとの発想としては、学生に地方の農山村や小都市を生で体験してもらうことによってその価値に気づかせ、将来のUJ1ターを増やそうというものであったが、筆者は先に述べた交流論の延長上に、特に小さな地域においては、学生を預かること自体が地域の活性化につながると早くから主張してきた。おそらく学生の受入れが地域の活性化につながるというならば、多くの人は、学生の斬新な感性で地域に対していろいろな指摘をしてもらうことに価値があると考えるであろう。また、大学院生も含めれば、地域計画や農業経営等の素養のある学生もいて、地域のさまざま



早稲田大学教授
みやぐち としみち
宮口 侗勉

滞 在型交流そしてーターンと 地域の活性化

1 地域の活性化とは

活性化という言葉は近年極めて頻繁に使用される。「活性化を図る」といういい方は相当いろいろな場面で使うことができ、時に曖昧さも伴っているのが実情であろう。その意味をまずはつきりさせておきたい。

活性化とは、活性の度合いを高くすることである。そして活性の度合いとはもともと物質の化学反応のしやすさをいう。発ガンにかかわるといわれる活性酸素は、まさに化学反応を起こしやすい酸素であって、反応の結果、困った物質がつけられることが病気の原因になる。したがって地域の活性化とは、これとは逆に地域にプラスになる反応が常に起こっている状態、もしくは起こりやすい状況

をつくり出すことに他ならない。

地域の活性化を地域経済の活性化という意味に使うなら、それは従来いわれてきた産業振興とほぼ同じ意味になる。地域の資源が新しく活用されてさまざまなビジネスが生まれることが地域経済の活性化であり、概念的には、人とモノ、さらには人と人の間に新しい化学反応が発生することを意味する。

地域の活性化は、経済的側面のみで語られるべきではない。もう一つ忘れてならないのが、地域社会そのものの活性化である。社会的活性化といってもよい。市町村やその中のそれぞれの地区は、内部にさまざまな人の組織を抱え込んでいる。最も基本的なものとして町場では町内会、農村では集落がそれにあたるが、それらの組織がよい形で機能しているかどうかは、住民生活にとって重要な問

題である。これらを含めて大小のさまざまな組織があり、近年ではNPO法人などもこれに加わってきた。これらの組織が住民生活によりプラスに働くように反応を起こさせることが、地域社会の社会的活性化ということになる。

逆に、人の役割が固定してしまっていて何の反応も起こらず、新しい仕組みが全く生まれない状態が、活性化と程遠い状態だということになる。水がよどんで何の動きもなく溜まっている状態を考えればわかりやすいであろう。人がいきいきと動いている地域社会は、そこに多くの人と人の反応を生み出す。そしてその反応が多くの人から活力を引き出す。これがまさに活性化した地域社会ということになる。人と人の反応にモノやコトがうまく絡むと、新たな地域ビジネスの発生にも

(2) 宮崎県小林市

1. 小林市シンポジウム議事録

第1部: 基調講演

中央大学大学院公共政策研究科・総合政策学部 細野助博教授

(司会)

基調講演につきましては、中央大学総合政策学部、細野助博先生お願いいたします。

(細野)

ワークショップを行うに当たり、にぎわいというものをどのように考えるかについてお話したいと思います。

中心市街地も観光地もにぎわうということがとても大事です。どうやったらにぎわうのか、にぎわうとはどういうことか、そのヒントになればと思います。

まず、町がにぎわいをうむためには売りが必要です。何が売りなのか、ということです。売りとは何か、それはハード、つまり

建物、とソフト、どうやってそれを活用するか。その二つがマッチしないとだめなのです。

バリ島の写真をみてみましょう。新しく開発された地域に日本資本のショッピングセンターがあり、ハードはすごくいいのですが、人がほとんどいない。ところが、歴史的屋並みが続く町中はおそらくとても古いところで、スクールが降ると雨が漏ってしまいますが、そんなところでも、人がたくさんいます。バリ島に来た思い出を作るためには写真ばかりでなく何か小物を買いたいでしょう。ハードだけでは虚しいのです。まず、ハードとソフトがマッチしなければならない、ということです。

2つ目は、お客の数です。人がいないショッピングセンターと観光客がいる街中、どっちがにぎやかか分かりますね。ほんとにこれが売りかどうかはお客に聞かなければいけないのですが、聞くのが恥ずかしい場合は、人の数を数えればよいのです。

3番目が一番大事です。あれもこれも売りだよ、というのではだめです。どこかに集中し



なければいけない。技術と革新とありますが、たとえば、ケータイで結構いろんなことができますね。あれもこれもできます、と技術者は言います。でも消費者としては、100%使いきれない。自分が使える物だけあればいい。技術はトップでも、何を売りとするかを決めていないと本当の技術革新はできない、ということです。日本人は本当にまじめで、新技術や新製品はどんどん先に行くのだけど、消費者がおいてけぼりを食ってしまう。スティーブ・ジョブズは、自分がエンドユーザーとして何がほしいかから始めました。町づくりも同じです。どういう町の売りでやろうか、という合意形成ができたところから、ではどういう仕掛けをしようか、ということが決まるわけです。それがイノベーション、革新です。イノベーションとは、他に誰も考えていないことを誰もしていないことを一早く、ということなのです。

4番目ですが、売りは活用しなければならぬ。活用すればどんどん進化します。活用しなければ存在しないも同じです。

売りで変化した町の例です。アメリカ郊外の何の変哲もない97年の町の様子ですが、どうやって町を作ろうか、という再開発が必要になった時に、東海岸で映画の研究所を作りたい、場所を探しているという情報を得た。うちがやりたいと手を挙げて、ここに全米映画研究所というオンリーワンを作った。たったそれだけです。住民達が誘致しただけで、この町は映像文化の町だという売りができたのです。そうすると映像関連の会社が2,000人の本社の社員を連れて引っ越してきました。町の短大が大学院を持つ大学になり、町の人たちが誇りを持つようになってきた。誇りを持てば投資のお金がやってきます。

私たちは今、福生のお手伝いをしています。小中高の子供たちと町づくりをしています。福生というところは、東京の中で学力水準が2番目に低いのです。すると学齢期のお子さんを持っているお父さんお母さんは、福生なんて出ましようよ、となる。今福生では、住民票を移す人にもれなくアンケートを取っています。理由は二つしかないのです、住宅と教育で福生の再生を計画しているのです。ではどうしたらいいのか。

町の三分の一を横田基地が占めています。これは普通マイナスだと思うでしょう、でもマイナスではないのです。外国人がたくさんいるから。基地の中では英語を話しています。日本人はどちらかというと英語が不得意です。そうすると、今、下から2番目でも、英語でトップになることもできるのです。基地の人たちに来てもらって英語の教育を小学校から中学校でやらせる。これは総合特区を使います。うちの学生たちが行ってお手伝いしています。これはインターナショナルフェアといって、基地の人たちと基地の前の商店街の友好関係です。総合改革特区で英語の授業を小学校からずっとやるよ、というとすぐ来てくれる。単位の認定が文科省ではできないので、総合改革特区でやろうということです。これは宝探しです。子供達に福生にこういう町の宝があって、ということを英語で作文させて教材にする。その時に、ここにも空き店舗がたくさんあるのです。そこでITの業者やデザイナーに入ってもらって、たとえばバーコードをペンでなぞるとネイティブの音が聞こえるテキスト作りという企画をやろうとしています。

財産がたくさんあり売りで悩んでいるところがあります。これは花巻市です。花巻温泉、花巻空港、新幹線の新花巻駅、宮沢賢治など色々ある。でも何を売りにしていいかわからない。宮沢賢治をもっと前面に出せばいいのですが恥ずかしがって出さない。宮沢賢治検定というご当地検定があるのですが、花巻でなく盛岡でやっているのです。

今日お話ししたいことは、毎日にぎわうことが大事かということです。にぎわうとはどういうことか。私は新潟の出ですが、一日市とか、二日市、三日市、十日町、廿日町などがありますが、これは市が立つ日で、中国もそうですが、ゼロのつく日は休みなのです。一開いて、隣町で二開いて、反対側の隣で三開く、次は四、五という形で行商していくわけです。一番の中心地が月に4回、中くらいは3日、小さいところは1日、などという形で市を開くのです。そういうことで考えたらどうか。

毎日にぎわうことは不可能です。どんなショッピングセンターでもそうです。土曜日曜になると駐車場がいっぱいになります。ご当地でも毎日混んでいるスーパーありますね。夜遅くまで開いている八百屋もあります。個店は毎日にぎわっている、それはそれでいいのです。ところが地域、地区としてのにぎわいは毎日是不可能的なので、どういう形でにぎわいをつくるか。いつでもにぎわうことができる、これが大事なのです。

にぎわいは意識改革の手段である。つまり、にぎわうことによって、たとえば私たちが東京から今日参りましたけれども、それで小林市の昼間の人口が増える。そうすると、顔を合わせるだけでなく、いろいろな考え方が生まれる。そうすると考え方が変化していく。意識改革です。

皆さんに毎日にぎわうということが本当に価値があるかということについてお考え頂きたい。たとえば、北海道のスーパーなんか土日しか開かない。土日に全部やる。あるいはスキー場だってそうです。夏儲かっているスキー場なんて聞いたことないでしょう。満遍なくやっても飽きられてしまう。

また、にぎわいは協力しなければ成功しません。ご当地は三つの地域が一緒になります。どういう形で協力してやろうか、市の中心はあそこだ、あそこにテントでいいからにぎやかにしようと。海外の朝市なんてみんなテントです。どうやって新しさ面白さを見せながら人を寄せるか。終わったら帰る。その TPO、時間の流れ、リズムを作って、人の流れ、リズムを作る、これが町の活動を作るわけです。どういう町のリズムをつくるかがとても大事です。

六次産業の話です。6 という字は、足し算では $1+2+3=6$ です。掛け算でも、 $1\times 2\times 3=6$ なのです。六次産業は足し算ではない。お役所がそう考えても、例えば一次産業がゼロでも、二次と三次が頑張れば 6 になってしまう。ところが掛け算だと、ひとつの産業でも振るわないと、他が頑張っても限りなくゼロになってしまう。ということは全部頑張らないといけない。一産業が頑張った、ではそれを加工しよう、そこまですまくいっても販路がどうにもならなければ、ゼロになってしまいます。それではイノベーションになりません。農産物が豊富な町のイノベーションには六次産業がとても大事なのです。どうやるか、どう

やってバランスを取って、掛け算の大きな数にするのか。それを今日考えて頂きたいと思います。

(中央大学大学院公共政策研究科・総合政策学部 細野ゼミ生中間報告)

8月に一度ここで、ファームステイなどを交えて体験をさせていただきました。実際の体験や統計データの解析を織り交ぜ、皆さんの小林市の町づくりの足しになればと思います。

小林市の現在を皆さんに共有していただくために、まず、小林市の現状についてお話いたします。地理的な位置ですが、鹿児島から車で約1時間半、都城からは



20分、宮崎から1時間20分、走行基本計画の中でも見られますが、交通の結節点になっており、周囲が大都市に囲まれているため、他の地域に行きやすいということがわかるかと思えます。

交通事情を具体的に見てみますと、車の通行台数は、中心部は一日1万5,000台、それだけ他の地域とのつながりになっていることがわかります。

地理的環境がオーブシステム化を招いた、とタイトルにあるように、他の地域、すぐそばに大きな地域があって、しかも交通の便もよい、そこに行きやすい、それが何を引き起こすかという、町が開けているという状態は、もちろんよいことではあるのですが、地域間の人、もの、カネ、情報が魅力あるほうに流れていく、例えば一方によりいいものがあれば、行きやすいからそちらに行く、という状況が起きてしまう。小林市は近隣に大都市がある、それをつなぐ国道が存在するため、周囲との競争が宿命付けられています。よそにいいものがあれば、そちらに小林からどんどん人が流れていってしまう。地理的にそのような状況にあります。

これから、人口が外に流れていっているという話をしますが、なぜ人口に着目するのか。経済の基礎である需要供給を作る、それが人口です。町の将来を作る担い手が、ここでできていくということで、人口が町の将来を作るともいえます。人口は町の原動力を作るとても大切な要素です。その人口が外に流れてしまっているということを見ていきます。

平成16年から21年の社会増減、人が亡くなったり生まれたりする自然増減とは別に、人の転出転入による社会増減の部分を見ると、すべてマイナスになっていることがわかり

ます。これは人がどんどん減っていつてしまっているということです。外に住居を変えており、県内、県外への人口の流出状態が持続してしまっているという状況です。さらに地図で、ピンクの部分が人口が増えている部分、水色が減っている部分です。中心市街地もやはり減ってしまっているのが現状です。

ではその流出する人口はどこに行ってしまうのか。中心市街地の下の郊外のほうに大型店舗が現在あります。大店舗があるほうにどんどん人々が移動してしまっている、これが人が流れている要因ではないかと考えています。

さらに、これは歩行者数ですが、どんどん右下がりになっています。大店舗が郊外にできると、中心市街地に人が来なくなっているというのがこのデータからわかると思います。

実際に中心市街地の現状はどうかというと、空き店舗率が増えています。5つの商店街がある中で、一番多いところで2店舗に1店舗が空き店舗となっています。

私たちも前回の8月にフィールドワークをしまして、中心市街地の様子を調査してきました。いくつか中心市街地活性化基本計画に載っていた事業が、ここで達成されているのではないかとと思われることがありました。国道221号線4車線化事業、パートショップ事業、駅整備事業といった、基本計画に載っていた部分の事業が進められていることがわかりました。

その一方で、まだまだな部分もありました。たとえば商店街というのは、私たちが歩いたのは夕方ぐらいでしたが、やはり人が少なかったということと、シャッターが閉まった店舗が多い印象を受けました。また、駐車場をたくさん作るという事業が計画の中にあっただのですが、その駐車場が果たしてどのくらい使われているのかということが少し疑問に思った点です。

今説明した点をまとめると、ここ10年間で起こった変化は、まず郊外化、中心市街地の衰退です。郊外化は人口がどんどん外に出てしまっている、その要因のひとつは大店舗の需要が拡大しているのではないかと。中心市街地の衰退、フィールドワークで感じたように賑わいが減少してしまっていること、小林市は地理的にもオープンシステムの中で近郊に大きな町があるということで、規模の経済では勝てそうにないようなところが見られました。このように中心市街地が衰退している。郊外を主としたライフスタイルが小林市の皆さんの中に浸透しているというのが10年の変化から起こった状況です。中心市街地がオープンシステムで激化する競争に勝ち残れなかった、というのが、私たちが実地調査やデータからわかった結果です。

ここまでは、地域間オープンシステムの中で、中心部の郊外化が進んでいる、郊外化の中で特に小林市の中心市街地は10年間の変化に悲鳴を上げているという話でした。

この10年間に起こった変化の中で、郊外化は暗いものですが、一つ明るいものがあります。それは小林市のもうひとつの変化、合併です。こちらに平成18年度新小林市誕生、というポスターが貼ってありますが、小林市は近年、野尻町と須木村で合併をしました。合併というのは、3つの地域が地理的に引付いたという以上の効果を生みます。例えば、農

業に着目したのがこのグラフです。平成 16 年と平成 18 年の産出額をこちらに並べています。平成 16 年は小林市の須木地区と旧小林地区の二つだけで、平成 18 年にはそこに野尻地区が加わったものです。このグラフを見ると、特に野菜、果実、肉用牛が、平成 16 年から 18 年にかけて大幅な産出額の増加が現れていることがわかります。このように合併というのは、農業の産出額を底上げする、それは産出量が増えるということでもありますし、産出される作物の種類も増えるということでもあります。

また、合併のメリットは、地域別の就農者数の変化にも表れています。これは 2000 年から 2005 年で、就農者数、第一次産業従業者の特に農業ですが、これがどれだけ増えたのか減ったのか、というのを示したグラフです。ピンク色の丸になっているところが増えたところ、水色の丸になっているところが減ったところ。この増えた部分は、野尻や須木の地区に位置しています。就農者が増えるというのは、農業全体の存続にかかわってくるとても大切な問題ですから、その点でも、3 地区の合併がプラスに働くということが言えると思います。



次のセクションは、この 10 年間の変化の中で、小林市はどのような施策をもって地域活性化に励んできたのか、ということの説明をします。先に結論を申し上げます。小林市のこれまでの町づくりは、このような構図で行われてきました。先ほど地域がオープンシステムということで、小林市がその他の大都市や郊外の大店舗との対決・競争を余儀なくされているという話をしましたが、この構図の中

で小林市の政策は、中心市街地に投資をすることでこの競争に勝とうとしてきたのです。具体的に中心市街地で何をしていたのか、大きく分けると二点です。一点目が商業による賑わいを創出しようとしたこと、二点目が、ハードによる魅力的な町を作ろうとしたこと、です。

なぜ中心市街地をピックアップして投資をしたのかというと、中心市街地に投資することが、小林市全体の利益になるという考えが当時あったからです。その考えの全体が一体どこから来るかというと、地域全体に住んでいる人が中心市街地をライフスタイルの中心に位置づけているから、その小林全市民のライフスタイルの中心にある中心市街地に投資することが一番いいことだと考えられてきたのが、これまでの小林市の中心市街地活性化という町づくりでした。約十数年前に作られた小林市中心市街地活性化計画の中で、暮らしのステージ作りのところには、回遊性と特殊性を持った商業空間への再生、中心市街地を回遊性のある商業空間にしていこうという、商業で競争に勝っていこうという姿勢が見られます。そして、市民全体のステージ作りの中にも、賑わいを創出していく町づくり

という言葉や、商業やサービスの魅力向上といった文言があります。このことから、中心市街地を商業をもって賑わいのある町にしたいという考えが書かれています。

その中心市街地活性化事業の中で具体的に行ったものの代表的なものは二点です。ひとつが整備事業、アーケードをきれいにしたり、住環境を向上するような投資を行ったり、いわゆるハードと呼ばれる投資を小林市は行ってきました。もう一点は、小林市の中心市街地を商業の盛んな町にしようという目標の下で、商業化活性化事業というものも計画の中に盛り込まれています。先ほど写真でも紹介がありましたが、水と緑のあふれる町にしようという景観事業を行ったり、歩行者天国、フリーマーケットや空き店舗対策事業など、さまざまな取り組みへの挑戦が活性化事業計画の中には盛り込まれています。しかし、ハードのほうはしっかり整備されているという印象を受けました。町の中はとてもきれいでしたし、駐車場もきちんと管理されていました。一方で、ソフト事業のほうは今どういう状況になっているのか、成果が上がっているのかということフィールドワークの中で見出すことは、私たちにはできませんでした。察するに、チャレンジショップ事業や空き店舗事業、各イベントに関しておそらく取り組みはあったと思うのですが、参加者の不在やさまざまな事情からそれが持続しなかったのではないかと推察しています。

このように、中心市街地を地域全体の人のライフスタイルの中心であると考えの下、中心部の商業を活性化させよう、そのためにハードへの投資を行ってきたというこれまでの町づくりの方法は、小林市のこの10年間の変化の中で少し考え方を変えなければならない地点に来ているのではないかと感じています。

①ライフスタイルの郊外化が定着してきている。人口の流出、流出に伴う店舗の郊外化、郊外の大店舗が商業の利益のかなりの部分を担っている、というところから、小林市のライフスタイルの中心は郊外に移っていったという事実がここにあります。中心市街地を活性化して地域全体が盛り上がる、活性化するという前提は、人々のライフスタイルの中心が中心市街地にあるという前提に基づいたものですが、その前提が10年間の変化の中で崩れつつある、ということです。これは小林市だけではなく、高速道路や新幹線でオープンシステムが加速している日本全国どこの地方でも起こっている問題です。郊外化が進んでいるというのは全国的な潮流です。ただ、そういった潮流があるならば、潮流にあわせた新しい取り組みをしていく必要があるのではないかとというのが①での指摘です。

②従来の考え方で勝利は難しい。これまでの中心市街地活性化事業のメインは商業の発展でした。しかし、小林市の周辺には郊外の大店舗や、都城、宮崎、鹿児島といった大都市が控えています。それらの大都市を相手に、商業規模で勝っていこうとすることは、不可能ではないにせよ、予算もたくさん要りますし、難しいことなのではないかと考えます。

③整理事業や駐車場などハードの面では実現されていますが、ハード事業そのものは魅力には直結しない、ということです。ハードは、魅力作りの下支えをする意味で不可欠で、ハードがあって初めて地域の魅力はいきてきます。しかし、ハードそれ自体は魅力ではな

い。このあたりは少し実感されづらいと思うので、この後例を使って説明していきます。

町が活性化していくため、町づくりをする上では、ハードとソフト双方がうまくかみ合った町づくりをしていくことが大切です。先ほどハード事業の例で整備事業や駐車場事業、再開発事業をあげましたが、このハードは、ソフトの効果を下支えするものです。では一方のソフトとは何でしょうか。それは人が集まる、人を集める魅力づくりです。人を集める魅力とは、他の都市にない差別化がその町づくりに実現されているかどうか、ということです。例えば、イオンのような郊外型の大店舗を小林の中心市街地に作ったところで、それはソフトの魅力につながるのかというと、商業の魅力には確かにつながるのかも知れませんが、差別化が図れていないという意味では、人の集まる魅力になるとは直接にはいえないと思います。小林市の場合では、他の大都市の魅力とは別の、もっと差別化を図った上での魅力づくりがソフトの魅力にあたります。中心市街地活性化のほかの事例でよく挙げられるのが、そこで何らかのイベント、チャレンジショップ、ワークショップを行うなどがあります。このソフトとハードが絡み合って、例えばイベント事業を行うにしても、せっかく魅力のあるイベントを行っても受け入れる駐車場がなかったらイベントはうまく回っていきませんから、イベントの発するソフトの魅力とそれを支える駐車場を作るといったハードの魅力、それらがかみ合って初めて町づくりは実現するものなのです。それがどちらかに偏っているのは、どんなに多額の投資をしても、町づくりの魅力にはつながっていかないということが私たちの提案です。

このソフトとハードの連携について、他の事例で説明します。私たちのゼミでは昨年富山市について研究をしました。こちらが富山市中心市街地です。ここに富山駅があり、ここが商業のひとつの拠点になっています。もうひとつ、正当性ある商業の拠点として、総曲輪地区というところがあります。この富山地区と総曲輪地区は約2キロの間が開いており、その2キロの間は商業街ではなくビジネス街でつながっているところです。このようにビジネス街によって商業集積が分断されていることを何とかしようと富山市は考え、その二つの地区をつなげるためのLRT、路面電車を作りました。ここに路面電車を走らせることで、二つの商業集積をつなげようとしたのです。作戦としては、正当性を持った総曲輪地区を再開発し、商業の魅力を高めます。次にLRTを環状化し、総曲輪商店街をさらに再生させていく、再生を拡大させていく。そして双方がつながる波及効果をもって、両方の商業を活性化させようと考えたのが富山市でした。そのために路面電車を作るお金として、国の補助金を除いて富山市自身が30億円を投資し、また、下の商業地区を盛り上げるために、フェリオという大店舗を作って、そこに125億円を投資しました。富山市は人口40万人の自治体である程度お金を持っていて、中心部にもそこそこ人が住んでいるという、そもそも恵まれている状況だったので、これでうまくいくと富山の人は考えていました。結果的に、LRTはもう少し前から開通していましたが、商業施設のフェリオが開店したあとも人通りは減り続けました。富山市の教訓はいくつもあります。例えば、商業集積の魅力を高めようとしたこのフェリオ、これは三越のような百貨店です。その百貨店を地価

の高い中心に敢えて建てることでソフトに頼らずにハードのみで利益を生むことができたかという、僕はそれはあまり生めなかったと思います。先ほどソフトの魅力の上では差別化が大切だという話をしました。この差別化を、一般的な大百貨店のフェリオ再開発によって図れたかという、僕はできなかったと思います。結局フェリオを作った 125 億円は百貨店を作る箱を作ったはいいものの、人を呼び寄せる魅力は作り出せなかった。ハードに偏重した政策になってしまったということです。しかし、ソフト的な相乗効果を生むことができず、結局この 30 億と 125 億円がハードのための投資になってしまった。

ここ一週間の新聞ですが、富山の中心市街地の活性化は今厳しい状態にあるそうです。人口はいまだ戻らず、中心市街地の活性化で歩行者人口と居住者人口というものを富山の指標に挙げていたのですが、どちらも目標に届かないということです。これだけたくさんのお金をかけても、これだけ大きな都市人口規模を誇っていたとしても、オープンシステムの中で差別化というソフトの魅力を作れなかった富山市、ハードの魅力にたくさんのお金をかけた富山市であっても、活性化はうまくいかなかったということです。

ではどうやって、差別化、活性化を行っていけばよいのでしょうか。

10 年間の変化の中で郊外化と合併という大きな潮流があったわけですが、その時代の変化に合わせた新戦略を小林市は持つべきではないでしょうか。そのためには、今まで中心市街地単体の投資、活性化と郊外、他の大都市との分裂構造があったのを、中心市街地だけではなく、旧小林市、そして合併した野尻地区、須木地区、その地域全体の活性化をもって、これらのオープンシステムの中での競争を戦っていくべきだろうと思います。考える上で、私たちが大切だと思ったポイントをいくつか挙げさせていただきます

一点目は、市全体にあるものとその変化のフル活用をしていくべきだと思います。郊外化は確かに、中心市街地にとってはマイナスの変化だったかもしれませんが、しかし、合併というプラスの変化もこの 10 年間であったわけですから、その変化を活用しない手はないと私たちは考えます。次に、規模ではなく質と差別化で勝負していくべきという点です。先ほど 40 万人の人口を誇る富山の例を挙げましたが、そこからわかるように、大切なことは規模で戦っていくことではないのです。特に小林市の場合は、オープンシステムの中で、周辺に大きな郊外大店舗がありますし、一時間ほど車を飛ばせば宮崎市、鹿児島市、都城市といった大都市がすぐそこにあるわけです。その都市と、人口の面では劣る小林市が戦っていく上で、規模での戦いを挑むことは、不可能ではないにせよ非常に非合理的なことであると私は考えます。大切なことは質の向上と差別化を図ることで、町独自のソフトの魅力をもって競争に勝利していくことが重要であると考えます。そして、町全体で戦っていくということですから、これまでのように中心市街地の商業で活性化していこうという、中心市街地にそういう役割を期待するのではなくて、もっと別に担う役割があるはずで、それこそ、地域全体で戦う上での顔の部分に中心市街地になるべきではないかという話をこれからしていきます。

合併という 10 年間の変化のプラスの面をもう一度確認してください。合併によって果実、

野菜、肉用牛がすべてアップしていますが、小林市は合併によってたくさんのコンテンツを得、それにより農業産出額が上昇しています。そして、合併の結果如何にかかわらず小林の農業はとても元気です。宮崎の多くの自治体が産出額を落とす中、小林市は善戦しており優秀な農業を持っています。また、西諸地域という、小林市と高原町とえびの市というこの5地区の中でも、小林市の農業は力強いものを持っているということがポイントです。西諸地域全域を100としたときに、小林地区はどのような出荷額の変化をしているのかをみると、西諸地域全体の農業の底上げを小林地区が行っているということがわかります。お伝えしたいことは、小林の農業は対外的にちゃんと力を持っているということ、そして、その伸びる力というものが野尻町との合併、地域連携というものによって、コンテンツが増える形でさらに効果が高まっているということです。

農業を中心に町を作っていこうという、力強い農業を使って町を作っていこう、地域全体を活性化していこうという狙いが今、小林市で作られた総合計画の中にも変化が現れています。抜粋したものを読み上げます。「農業を基幹に活性化し、わが国の食料基地の一角を担っていく」、要は日本全国の中で農業において私たちはひとつの地位を持っていますという自覚が小林の中に生まれてきています。こうした計画の変化の裏には、合併によるコンテンツ増加と、周囲で善戦する小林市という裏づけがあります。

そしてもうひとつ、これまでの中心市街地の商店街の振興を重点に行っていた地域活性化が、町、村への活性化に変化しました。中心市街地一点の発展ではなく、地域全体の発展が大切だというように、10年間の変化を経て市の方が認識されているということがここでわかります。この変化の背景には、さまざまな投資を行ってもどうやら中心地の商業が衰退する、この衰退は、投資自体がいけなかったのではなくて、全国的な潮流と郊外との競争という要因があったわけです。そして、町、村全体ということで、さまざまな産業連携、地域連携を持って活性化していこうという意志の現れであると思います。

これから先、小林市は地域全体で町を活性化させていかなければならない、その活性化には質、差別化が大切である、そして質で戦う上で何をキーワードにすべきかということ、それは私は農業なのではないかと考えます。農業は対外的な強みを持っていますし、合併によってさらに力をつける分野です。合併という変化を活かせるのが農業です。また周辺と比較しても力強い結果を残しており、一部の皆さんに作っていただいたSWAT分析の中でも各地区で得意とする農業分野があるということを書いていただきました。そのような各地区の強みをすべて生かせるのが農業です。そしてこの農業の強みを活用しようという思いが、市の総合計画の中にも現れています。

それでは、農業の強みを使った町づくりを、どのような戦略で行っていくか、コンテンツを作るのにどのような視点を持つべきだろうか、というお話を最後にいたします。農業を生かした戦略を構築する上で、私たちは大きく4つの段階を提示いたします。一つ目の段階、差別化できるコンテンツをこれからもっともっと増やしていく。合併によってコンテン



ツは確かに増えましたが、まだまだコンテンツを増やすことはできると思います。詳しくはまた後ほど説明します。次に3つの地域資源を最大限に生かす。コンテンツを作る上で、その下となる農産物が合併によって増えたわけですから、小林、野尻、須木の各地区だけではなく、3つの地域の地域資源をフルに活用していくことが大事である、それが地域全体で活性化を実現するということであると思います。三つ目、中心部は独自化の拠点としての顔になるべきである。これまでは、活性化の拠点それ自体が中心市街地に合ったわけですが、これから先は地域全体の活性化、その拠点、顔、ショーケースになるのが中心地なのだということです。最後に、こういったことに既に気づいて、取り組みを始めていらっしゃる方々が小林市にはたくさんいらっしゃいます。その市内のパイオニアに、地域全体で活性化していくわけですから、ノウハウの共有がお互いの利益になるわけです。一つ一つ見ていきます。

まず一つ目、コンテンツを作るのは地域を活性化させるためです。地域を活性化させるとは競争に勝てる地域を作ることです。競争に勝てる地域を作ることとは差別化を図ることです。というわけで、農業をつかってどのように差別化を図るのかという話をします。

現状、小林市の農業は差別化を図れているだろうか。このような視点で皆さんに書いていただいたSWAT分析をピックアップしました。強みとして、ブランド化に成功しているものがあるということの評価されていました。太陽の卵などのブランドが宮崎県の中に既にいくつかあります。一方で、このような先進的な取り組みがただ一握りでしか実現できていない。これは実現することはとても難しいことで、さまざまな多くの人々の協力やお金も必要ですが、今の段階では先進的な取り組みは一部の要因として挙げられます。その特産品の価値が実はその周辺地域とあまり変化をしていないということです。ブランド化ひとつ取ってみても、マンゴーや金柑に関しては県のブランドに依存しており、独自のブランド化を図っているメロンに関して、十分な成果を残しています。ヘクターあたりの生産量も高いですし、価値も出ています。しかし、ヒット数において、若干弱い部分があるということがあります。ブランド化に関してももう一押しできる場所があるのではな

いかと思います。そこで我々が考えるのが、六次産業化という考え方です。先ほどの先生の話にもありましたが、一次産業を加工したり販売したりすることで、他の産業と掛け合わせて新たな付加価値をつけ、それをゆくゆくは地域活性化に生かしていくという考え方です。この六次化を実現することで、産地それぞれがコンテンツを増やす主役になりますし、活性化が農業以外の産業に波及します。合併によって増えたコンテンツは何倍も魅力を増やしていきます。六次化の実現で中心市街地、そして中心市街地の主体である事業者さんそれぞれに対して新しい役割が生まれます。

先進事例を紹介します。つきとくさんという有限会社が加工に成功し、さまざまな製品を売っている。我々は東京にある宮崎県のアンテナショップに行ったのですが、そこでも多くのつきとくさんの製品を見ることができました。そして、グリーンツーリズム、自然体験型旅行の先進事例として、北霧島田舎物語推進協議会さんが取り組みをいらっしゃいます。農業と観光業の連携に取り組んでいらっしゃる自治体があります。このような農業のパイオニアたちにノウハウを学んで、六次化で顔を作っていけばいいと思います。

続いて、六次産業化のヒントとして他県の事例をご紹介します。

以下の四つです。①新しいコンテンツを作っていこう、②今ある地域資源を活用しよう、③中心市街地を活かしていこう、④様々なノウハウを共有しよう、という4点です。

①の例を説明します。高知県安芸郡馬路村、人口は999人、第一次産業比率が58.5%、村の面積の96%が森林で、鉄道も国道もコンビニもない、信号もない小さな村です。こちらはゆずの産地で、ゆずを使った加工品を販売しています。そのヒット商品に「ごっくん馬路村」というものがあります。農協の職員が中心になって開発を進め、それが村づくりとしても進展した事例です。その商品は、地元で使ったゆずを使って作ったゆずのジュースです。昭和63年に商品化し大ヒットしました。1本120円です。ANAの機内販売でも売られていたことがあります。特徴としては、商品だけでなく、馬路村そのものを売り込んでいくという点がポイントです。宣伝に馬路村の村民を使うということでも有名になりました。馬路村の販売システムは、役場と農協が連携を取り合っています。馬路村ゆずのハンドブックというものもあり、1987年から2007年までの20年間でゆずの生産量は2倍にしかありません。ただ、加工品の販売量は約33倍になっているということです。付加価値をうまくつけて、販売に成功しています。この事例をまとめると、商品と一緒に村を売っていること、消費者との関係を重視していること、ゆっくりした田舎というコンセプトの下に販売を行っていること。今もっているものを元にして新たなものを生み出している事例といえます。

二つ目は三重県三浜町です。三重県南部に位置し、人口は9257人、みかんが一年中栽培できる暖かい地域です。こちらが個人経営のみかん農園でみかんの完熟絞りジュースを生産している杉本農園というところがあります。こちらは、どこに売ったらいいのか、というマーケットの分析をうまくされている事例です。RFN分析という、誰が買いに来たか、よく買いに来る人は誰か、一番お金を使っている人は誰か、三つの視点から顧客を分析す

る手法をとりました。その結果、たくさん買っていく顧客と、少しだけ、たまにしか買わない顧客の二つがあるということを見出し、たくさん買っていく顧客にターゲットを合わせることにしました。その結果、高級路線をとりました。百貨店で販売したり、通信販売を行ったり、またパッケージにもこだわって高級感を演出しました。みかんジュースを贈り物にするためパッケージの箱が千円、ジュースが2本か3本入ります。みかんジュースは1リットル1,995円で贈り物にする方が多いです。この成功の理由としては、顧客を分析して層が分かれていることを見抜き、ひとつの層にターゲットを絞った、そしてそのターゲットにあわせたイメージを演出した。ということで、もともと持っているものの売り込み方を考えた、という事例です。

三つ目は地域資源を活用した事例です。石川県の金沢市、人口46万人、第一次産業比率4%、第三次産業が盛んな都市です。ここでは加賀野菜のブランド化に取り組んでいます。加賀野菜とは、簡単な定義は、昭和20年以前から栽培され、現在も金沢を主として栽培されている野菜のことです。加賀野菜として認定されているのは15品目です。黄色いマークが加賀野菜認定マークです。金沢市の農家が生産したもの、使った薬品の使用履歴を表示していること、ブランド協会の指導を受けたもの、という厳しい条件があります。また、加賀野菜を使用した加工品につけることができるマークの認定基準も厳しくなっています。厳しくすることで、加賀野菜の品質を高め、レベルをキープしています。金沢の六次化は、ブランドを徹底して管理し、加賀野菜のレベルを高く保つ、地域とのつながりという点で、加賀野菜を使った食品、料理、メニューを三つ以上持っている飲食店に認証マークを与えることで、地域全体で加賀野菜を盛り上げていこうとしています。

④中心市街地を生かす事例です。静岡県掛川市、浜松市と静岡市という大きな都市のちょうど間にあります。人口は11万人程度です。中心に市街地で地場野菜を販売するけつとら市というものを行っています。けつとら、とは地元の方言で軽トラックのことです。掛川の農家の方々が掛川の中心地で軽トラックの荷台で野菜を売ろうという取り組みです。毎月第3土曜日の9時から12時に、駅前通りを歩行者天国にして開催しています。市内の生産者や中心地の商業者の方も出店することができます。こちらのコンセプトは、新幹線も止まる掛川駅と掛川城の間の中心地に人がいないという問題を抱えていました。そこで、中心地に人を呼び込むために、この間の部分で何か行おうということで、駅前通りを歩行者天国にしお店を開いてみようということで始めました。それによって、掛川城と駅前の行き来が頻繁になるだろう、また、普段あまりかかわりのない生産者と消費者のかかわりの場を持たせよう、また2005年に合併したばかりの1市2町のまとまりを高めよう、ということで、掛川駅周辺を新掛川市の新たな中心地として魅力を高めるため、この事業を行いました。けつとら市の集客数です。掛川市のモデルとしては、定期的に中心地に人が集まる機会を作る、中心地に人を呼び込むきっかけを作ったということ、それによって市としての顔ができたということになります。ソフト面での整備をがんばった事例といえます。集まる施設を作るだけではうまくいきません。人をどう呼び込むかということまで考

えていた事例です。

⑤ノウハウの共有の事例です。広島県世羅町、人口1万7千人、第一次産業比率47.5%です。こちらは平成11年せら夢高原六次産業ネットワークを設立しました。町民が主体となりながらも、町やJAも加わった産業組織になっています。ここで何を行ったかという、せら夢高原という六次産業の拠点施設を作りました。そこで農産物の加工品の販売をしたり、世羅町とはこういうところだよ、こういうものがあるよ、ここに行けばこんな面白いものがあるよ、という町の情報を集める場所です。また、広島県広島市にある商店街に出展したりもしました。この六次産業ネットワークがどういう組織かという、町、生産者、農協、事業所が4者の担当者会議を行い、これからの方針について話し合いの場を設けている。町づくりを考える場合どうしてもそれぞれの立場だけで考えてしまいがちなのですが、そうではなく、いろいろな人が持っている知識などをどんどん集めていこうという考え方で行われているネットワークです。こちらが六次産業ネットワークにどれだけ人が来ているかを表していますが、この1999年がネットワークができた年で、ここから結構伸びていっています。売上額も同様に伸びています。世羅町の政策をまとめると、六次産業化のための推進の体制を作り、町全体として六次産業化を盛り上げていこうという土台を作りました。つぎに、その土台を元に、人材や資源や施設を皆で共有して活用できるようにしました。町の発展にはいろんな人たちの組織連携が必要であるということが言えると思います。

まとめると、①新しいコンテンツを作っていこう、②今ある地域資源を活用しよう、③中心市街地を活かしていこう、④様々なノウハウを共有しよう、という4点が言えると思います。

今の日本は、ここ10年で郊外化の進展がありました。オープンシステムの中で人はよりよい場所を求めてどんどん移動します。その流れが加速しました。ライフスタイルの変化によって、また移動によるリスクが減ってきたこともあり、移動を億劫に思わなくなったためです。それにより、中心市街地がだんだん衰退してしまいました。

小林市の例を見ると、現状の地域活性化政策では中心市街地活性化事業に重きを置きすぎている。ハード面の整備に偏重している。という二つの問題点がありました。その打開策として、小林市が今強みとして持っている農業を他の産業と組み合わせていろんな産業が皆で価値上げられるような政策をしていくことが大切であると思います。そこで私たちは1次産業、2次産業、3次産業を掛け合わせる六次産業を提案いたしました。六次産業化に当たって必要なことは、①新しいコンテンツを作る、②今ある地域資源を活用する、③中心市街地を活かす、④様々なノウハウを共有する、ということだと思います。ご清聴ありがとうございました。

第2部：地域づくり活動団体の活動紹介

北きりしま田舎物語推進協議会 泊氏
農家民泊部会部会長 加藤氏
NPO 法人小林ハートム 池田氏
JA 小林女性部 倉菌氏

(北きりしま田舎物語推進協議会 泊)

皆さんこんにちは。北きりしま田舎物語推進協議会事務局の泊と申します。簡単に北きりしま田舎物語推進協議会の説明をいたします。8/22、23に学生さんにも民泊を体験していただきましたが、北きりしま田舎物語推進協議会は小林市えびの市高原町の2市1町の取り組みです。北霧島地域の農家民泊をされている農家さんを中心に自然のガイドさんやインストラクターさんの集まりの会



員55名の団体で、力を入れている農家民泊が20軒ございます。農家に泊まって農作業体験、地域とのふれあい、地域の人々と話をすることによって心の交流をしていこうという取り組みです。ホームステイと違い、農家民泊は参加者の方々に体験料、宿泊料を農家の方にお支払いいただくことで、ひとつの産業としても成り立っていると思います。今、私たちが主力としている農家民泊のお客さんは、修学旅行で農家民泊を取り入れている学校が首都圏、関西、関東圏に多く、そういった団体のお客様を誘致することをメインにがんばっています。平成25年に、4校の中学校に来ていただくということで最終的な調整に入っています。

なぜ、教育旅行や修学旅行に農家民泊が取り入れられているということを説明します。先進地である沖縄で実際に農家民泊をされている農家さんから聞いた話ですが、非常に子供たちが抱えているいろいろな心の問題が、農家民泊を通して心の交流を持つことで、体験した後に、非常に落ち着いた充実した学校生活を送れるようになった子供たちが増えたと聞いています。こういった形で農業を知っていただくことと、心のつながりによって子供たちの抱えている問題を解決できるということが学校の先生方にも認めていただいて、修学旅行、教育旅行に取り入れられているということが、まだまだ今後増えていくのではないかと考えています。

私の方からは以上ですが、この会場に受け入れをしている北きりしま田舎物語の農家民泊部会部会長の加藤シゲ子さんに来ていただいていますので、一言お願いいたします。

(農家民泊部会長 加藤)

加藤です。今事務局長の話にあったように、私は受け入れという方法から、皆様にも協力やご指導をもらわないと、学校が決まっておりますので、受け入れ態勢がなかなか整わないのかな、という心配をしているところです。組織として、JA、行政、商工会など、いろいろなところと一緒に地域を盛り上げていきたいと思います。私たち農家からすると地産地消ということは、



本当に大事なことで、食育ということも大事なことだと思いますので、皆様のご協力をお願いいたします。でないと、私たち農家が農家民泊を増やそうと思っても限度があり、なかなか活動ができません。それで、地域としてパンフレットも作りまして、今頑張っているところですので、皆さんどうぞよろしくをお願いいたします。ありがとうございました。

(国土交通省 古澤課長補佐)

最近農家民泊の受け入れがいろいろな地域で行われています。私どものほうでもインターン事業をやっておりまして、北海道から沖縄までの市町村、NPOなどが実施している都市部の若者、学生を地域に招くという事業の紹介を行っています。昨年の実績ですが、私ができるだけで200名以上の方が参加しているようです。今年は震災などあったのですが、それでも8月末段階で130名以上ということですので、そういう需要はあろうかと思えます。それと、農家民泊ということで先ほど学校などの体験というお話でしたが、自動車教習所の教習生と農家民泊を合わせるというやり方をやっているところもあります。これは岩手県の遠野市にある自動車教習所です。合宿免許に合わせてツーリズムを行い、農家のお手伝い、牛の世話、米作り、収穫のお手伝い、体験をさせてもらうということをやっているようです。関西方面からも教習生が来ていることのように思えます。そう考えますと、学校だけでなくいろいろな場が活用できるのではないかと、いろいろな連携が取れば活発化する可能性はあるのではないかと思えます。

(北きりしま田舎物語推進協議会 泊)

ありがとうございました。補足ですが、現在修学旅行などの受け入れは、契約の都合上、2年後に学生さんがいらっしゃるの、1年生のときに契約を結んで2年後、と、関西圏は3年生の5-6月にするということですので、間が開くのです。実際、今は修学旅行の受け入れはしていませんが、企業さんが企業研修として農家民泊を利用していただいたり、個人

のお客様にも興味を持っていただいたり、5-6人の人数で受け入れを行っているところです。

(学生)

私たちも8月末に農家民泊をさせていただきました。この中にFacebookをされている方もいらっしゃると思いますが、細野研究室でもFacebookのページを開設しており、そちらで農家民泊を紹介させていただきたいと思っています。

(北きりしま田舎物語推進協議会 泊)

北きりしま田舎物語推進協議会にもFacebookのページがあります。

(司会)

ありがとうございました。続きまして、池田様、よろしくお願いいたします。

(NPO 法人小林ハートム 池田)

NPO 法人小林ハートムの理事をしています池田と申します。小林ハートムはNPO 法人ですが、西諸地区は3-4年前、自殺率が全国で2位と聞き、高原でフォーラムが行われました。そこに参加した人の中から小林、高原、えびの、野尻などの方が集まって、これではいけないということで、なぜ自殺が多いのかというと、相談する相手がいない、話し相手がいない、などいろんな場面が出てきて、そのときに「一日30人と話そう会」というものを作ろうということでできたのが最初です。活動するにはお金が必要であり、法人化したほうが真の経営らしいということで、高原では高原ハートム、小林では小林ハートムを作るということで始めました。



市の援助などをもらっていろいろ活動をしているのですが、自殺防止ということではパトロール、コンサート、フォーラムなど啓発活動は行っていますが、啓発活動だけでは自殺を考えている人たちを本当に助けることは、素人の私たちには不可能ではないのかということがだんだん分かってきています。自殺をする人で、私は自殺を考えていると打ち明ける人は少ないと思うのです。身近な人が気づくのが本当なのですが、そこまでも私たちは力不足ということが分かってきて、自殺を考える前に、地域活性化とか、とにかく小林の町を元気付けようということから始まり、そのためにはどうすればよいかと考えたときに、居場所がない、話せる場所がない、ということがあり、自殺ということではなく、地

域の中で自分の居場所作りをしようということがだんだん分かって来ました。

今現在、居場所作りということで小林市内に池山商店という茶飲み場をサロンのような形で作っています。池山商店はなぜ池山商店かという、私の旧姓が池山です。私の実家が2年前に母が亡くなって空き家になっており、店屋だったのでそれを茶飲み場として活用しようということで作りました。実際は高齢者を対象に考えていました。私たちは小林ハートムとして活動していたのですが、叔母が12月から民生委員をはじめ、叔母はとてもバイタリティーのある人で、一軒一軒回っているうちに、高齢者の一人暮らしがものすごく多いことに気づいたそうです。これは一人では回れない、一軒一軒回るのは大変だから来てもらおうか、とっていたそうです。そこで私が居場所作りをしようとしていたのとちょうど合致したのです。私たち小林ハートムも皆さん仕事を持っているのでできないということで、私は池山商店の店主として、叔母は店長として使おうかということで始めました。

池山商店は月曜から金曜までで、土日祭日は休みです。開店したのが1月16日、今のところ一日8~10人、延べ人数では1,500~2,000人来ています。システムは、100円持ってきてもらい、それがお茶飲み代です。叔母はとても世話好きで、池山商店の近くで生まれ育ったものですから、知らない人がいないくらい知っていますので、初めのころは通りかかった人がいたら「おいで、おいで」という感じで呼び止めていました。そうやって通りがかりの人を呼んでいたのですが、昼に帰るともう来ない、ということがあったので、皆さんに昼ごはんも一緒に食べようかということで弁当箱にご飯だけを持ってきてもらっています。そこに漬物と、叔母が一品何か作っています。それで1回につき100円もらっています。今のところ家賃などは池山商店もちで、小林市からいただけるよう申請はしています。

年寄りの方が言うには、今まで居場所がなかったが、こういう場所ができてよかった、ということですが、ずっとやっているうちに年齢層に変化が現れました。敬老の方は、今デイケアとか老人クラブとかに行かれて案外忙しいのです。でも、60歳からデイケアに行くまで、体は丈夫で健康だが心を病んでいる方、仕事がなくなったり子供がいなくて行く場所がないなどといった60代の女性の方など、年齢層が下がったと思います。残念ながら統計から見ると男性で来られる方は1割に満たない数ですので、男性の呼び込みもこれからはしようと思っています。自殺とかそういうところではなくて、自分がいる場所があるのが一番いいと皆さんに言われます。また、地区の中には毎日来られる方もいて、地域で偏ってきています。こういう場所が公民館ごとがあればと思いますが、月曜から金曜まで留守番をされる方はいないと思いますし、きれいな建物を建てなくても空き家などを生かせば利用できますし、いろんなやり方があると思います。とにかく皆さんに喜ばれていることは確かだと自負しています。皆さんも池山商店、暇でしたら遊びに来てください。

(司会)

ありがとうございました。JA 小林女性部部長倉菌様、よろしくお願いいたします。

(JA 小林女性部 倉菌)

JA 女性部の組織の代表をしています倉菌です。私どもはいわゆる農協の中にある女性部の活動ということで、これは本当に古い歴史の中で今があり、活動は非常に幅広く、食育活動、生産活動、認知症の勉強、健康についての講演会を聞いたり、大腸がんの検診などもやっています。地域活性化という面で言うと、食育ということになると思います。



今年、JA の女性の日、7月の第2土曜日と決まっています、その日にたまたま食育をされている方の講演をいただきました。そこへ私どもが体験として出向き、その時にいらしていた北きりしま田舎物語の皆さんの反応が非常によく、それでいろんな勉強会を兼ねて、先日参加されました。

JA は、それぞれの地域に小さな支所があり、それぞれに女性部も青年部もありいろんな組織が JA 小林で9支部あります。その中で営農組合などもありますが、それらとタイアップしながら、食育に関しては昔から「食育はJA」という感じで頑張っています。営農組合が平成15、6年あたりから組織され、その中に地域生活部というものがあり、その皆さんが女性です。その方々が代表で、伝承料理、地元で作られているものが、私たちの世代でも、というのは子供がまだ嫁いでいない、もらっていない、そういう世代ですが、その私たちが今80歳前後のおじいちゃんおばあちゃんから伝えてもらっていないものがたくさんあるということに気がつきました。それで地域の中で生産されているものはそれを作って食べていたという昔の食べ物について取り組もうということで、組織の中で女性たちが頑張っています。

それぞれの地域でどうしたらこのおばさんたちを集められるかということもあります。昔は農協の女性部というのは皆入らないといけない、というくらい皆が入っていました。でも、私の地域は15軒ありまして、今2軒になりました。そういう地域性があり、本当に少なくなっていて、その中で私はもう一人とこの地域のおじちゃんおばちゃん達に何か作って配ろうよ、というくらいに思っているのですが、まだ思っているばかりです。車で行ったり来たりしますので井戸端会議もありません。年に一回の総会の時に会うだけです。そういう現状の中で、JA 女性部の中のグループのみなさんに、「こんにやく芋があったから作ってみなない？」などと言って2、3人集まりこんにやくを作る。こんにやくの作り方も何種類かあるそうです。そこで、「私はこうしていたよ」「こんな風に聞いたけどね」

などと言いながら作っていく、そういう活動をしていけばきっと、何かを作ってみんなに配ろうと言う奉仕の心とか、ボランティア活動といったものが自然とその地区の話し合いの中から育っていくのではないかと思っています。それをどうしても実現したく、JA女性部は1期2年ですので、今年の行事は去年決まっていますので、来年から少しずつ自分ができる範囲で、皆さんの知恵を借りて、地域活動から始めていきたいと思っています。

(国土交通省 古澤課長補佐)

食育の話で、学校の給食に小林で作られた農産物を使うということは行っていますか？

(JA 小林女性部 倉菌)

食育活動というと、田植え、稲刈り体験をしてできた米を学校で食べてもらいます。その時に焼き肉をして農協から肉を提供して食べてもらったりします。学校内の給食は献立表があり、提携などの問題がありますので、市長の方になるべく農協を使って頂くようお願いしたいと思います。

(JA 小林女性部 倉菌)

食育ではなく地産地消の一環として、学校給食で地産地消をやっています。今地産地消率が50%を超えています。それをこれからも重点施策としてやっていこうとしています。

2. 小林市シンポジウム資料

「地域活性化への理解醸成」シンポジウム・ワークショップ まちの“にぎわい”を考える

中央大学
教授 細野助博

■プロフィール

◆経歴

昭和46年 慶應義塾大学経済学部卒業
昭和48年 慶應義塾大学院経済学研究科修士課程修了
昭和48-昭和53年 日本ユニバック（現日本ユニシス）研究員
昭和56年 筑波大学院社会工学研究科博士課程修了
平成7年-現在 中央大学総合政策学部教授
平成9年-平成10年 メリーランド大学大学院客員教授
平成11年-現在 中央大学大学院総合政策研究科博士課程教授
平成13年-平成17年 中央大学評議員
平成17年-現在 中央大学大学院公共政策研究科修士課程教授

◆所属学会

日本公共政策学会元会長、多摩ニュータウン学会会長、日本計画行政学会専務理事など。

◆公的役職

財務省財政制度等審議会委員、日本学術会議連携会員、(財)流通システム開発センター理事、美しい多摩川フォーラム会長。その他、(社)学術・文化・産業ネットワーク多摩専務理事。文部科学省現代GP審査委員、八王子市教育委員会教育委員、国土交通省GIS利用定着化委員会委員政策研究フォーラム理事、浜松市都市戦略化会議委員、立川市中心地商業等活性化基本構想策定委員長およびTMO研究協議会議長、川崎市港湾事業検討委員長、羽村市産業活性化委員会座長、横須賀市総合基本計画審議会座長など歴任。



◆業績

主要著書（単独著、編著のみ）

- 『コミュニティの政策デザイン』中央大学出版部 2010年
『中心市街地の成功方程式』時事通信社 2008年
『政策統計「公共政策」の分析ツール』中央大学出版部 2005年
『実践 コミュニティービジネス』（監修/共著）中央大学出版部 2003年
『政策学入門』（編著）東洋経済新報社 2003年
『日本論Ⅱ－政策と文化の融合』（編著）中央大学出版部 2002年
『続中央省庁の政策形成過程』（編著）中大出版部 2002年
『スマートコミュニティ』中大出版部 2000年
『中央省庁の政策形成過程』（編著）中大出版部 1999年
『現代社会の政策分析』勤草書房 1995年
『どうなる・どうする ポスト大店法』日本実業出版社 1991年
翻訳や論文、エッセーは多数。

◆受賞

- 平成14年度 日本計画行政学会学術賞論説賞（平成14年9月21日）
平成15年度 中央大学学術研究奨励賞（平成15年2月20日）

まちには“うい”が必要
都市の魅力を集中させる

“うい”とはなんだろう？

- ▶ ハードとソフトがマッチしていること
ハード先行は「空しい」
- ▶ “うい”を評価するのはお客
お客に聞け。数がその答え。
- ▶ あれもこれもは“うい”を弱める
技術と革新
- ▶ “うい”は活用しなければ「存在しない」に等しい
試行錯誤を積み重ねる

“にぎわい”とは何か？



“うり”で変化したまち



7

福生の課題

多摩地域で人口減少2市の一つ

- ▶ 学齢期の世帯が転出
学力調査でビリから2番目
- ▶ 学齢期前の世帯 + 高齢化世帯
- ▶ 住宅政策の不備
安くて高い民間賃貸
- ▶ 商店街の風通しの悪さ
- ▶ 「街の宝」が分からない！ 酒蔵の街、基地の街

- ▶ 横田基地から国際化教育「総合改革特区」着手

8

酒蔵・横田基地 + 16号線は“うい”



中学生の我がまちの宝探し・ 教材作り



財産あっても活かさない、 悩む宮沢賢治

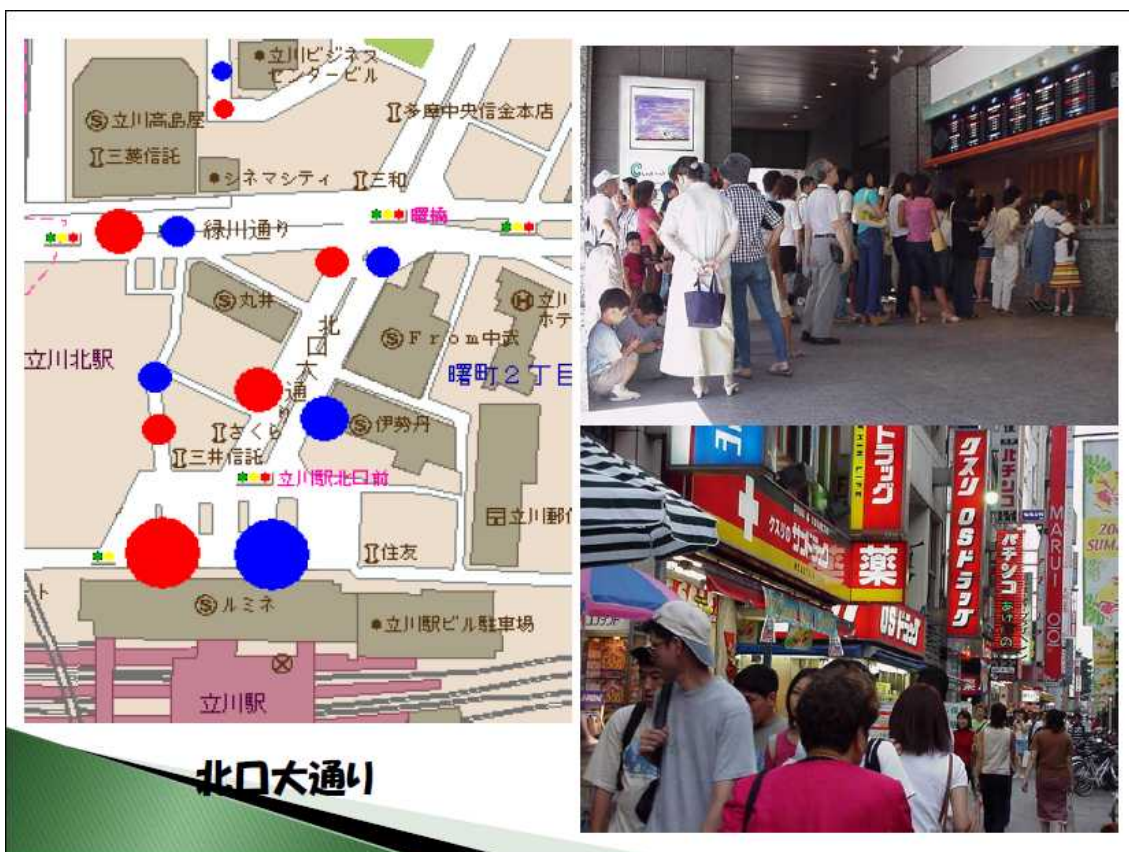


11

毎日“にぎわう”？ 地域で、市は月に八回くらい。

“毎日賑わう”？ これは不可能！

- ▶ 個店のにぎわいと地区のにぎわい
- ▶ にぎわいは“意識改革”の手段
- ▶ にぎわいは“協力する”ことから
- ▶ にぎわいは“地域資源の新しい組み合わせ”から
 $1 \times 2 \times 3 = \text{イノベーション}$





**南口商店街の
ホコテン**

**「統一シンボル」は駐車場
ではなく、
ペDESTリアンテッキ**

駅前が変身し、チャンス迎える



17

学生と商店主・住民WSから、課題が発見され、相互信頼とやる気が！



夜の7時から勉強会。
自前で維持する



18

新イベント:ミステリーツアー



19

新たな自信とやる気: 街のリーダー誕生



西山ラウンジ
www.nishikoyama-lounge.com

2009年 6月6日(土) 6月7日(日) 11:30~14:30

ミステリーツアー 1日30分限定ランチメニュー
ラウンジ風ミステリーカレー 750円

通常は夜のみ営業になっており、下記のようにメニューで楽しんでいただけます。

常設メニュー	本日ササギ	本日オカシ	本日ドリンク
100円	100円	100円	100円

元食セヨ...

20

1×2×3=6次産業化の戦略

“1+2+3=6”との違い

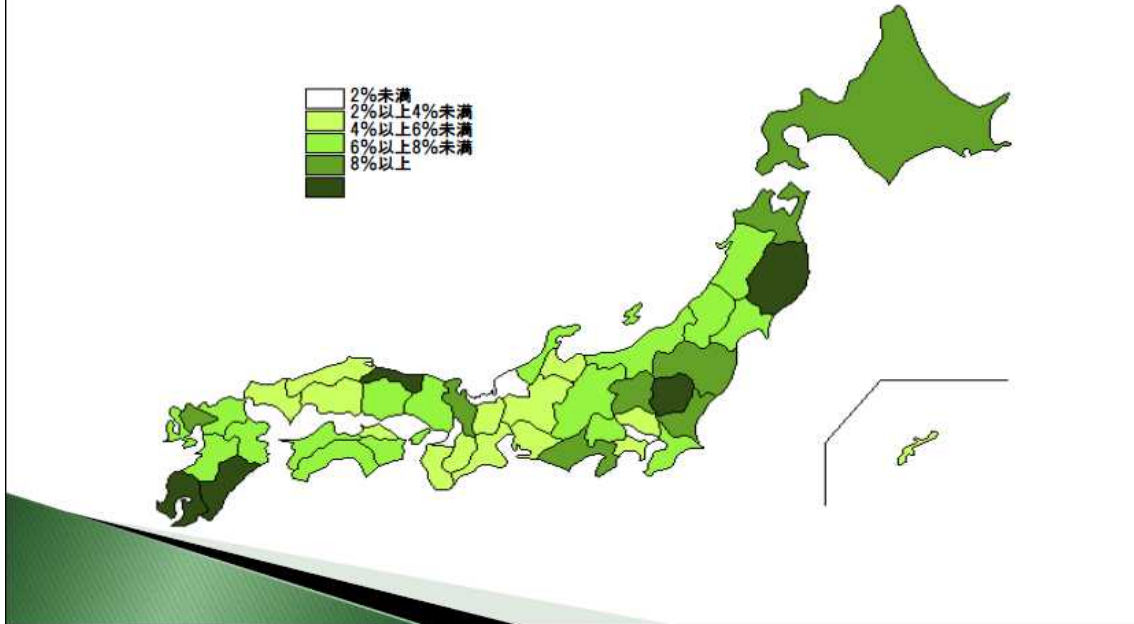
付加価値をつける

- ▶ 価格をつける
- ▶ 価値をつける
- ▶ 名前をつける
- ▶ アンカーになる

	2005年	2025年	増減
人口	1億2,276万人	1億1,927万人	0.93倍
高齢化率(全人口に占める65歳以上の割合)	20.2%	30.5%	1.51倍
単独世帯数(全世帯に占める単独世帯の割合)	29.5%	36.0%	1.22倍
食料支出額	73兆6千億円	72兆2千億円	0.98倍
全世帯の食料支出額に占める生鮮食品※への支出割合	26.8%	21.3%	0.79倍
全世帯の食料支出額に占める調理食品への支出割合	12.0%	16.6%	1.38倍

出典：農水省資料

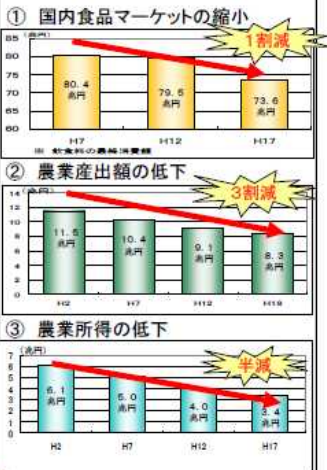
農業県こそ“未来をつかむ”先進県



地域資源を活用して、農山漁村の6次産業化

○ 雇用と所得を確保し、若者や子供も魅力を感じる地域づくりにおいて、農林漁業生産と加工・販売の一体化や、地域資源を活用した新たな産業の創出を促進して、**農山漁村の6次産業化を推進**。

現状



農山漁村地域における

- 企業の撤退
- 公共事業の減少

様々な地域資源

- 農林水産物



- バイオマス

- ・ 稲わら
- ・ 食品廃棄物
- ・ 未利用間伐材



- 経験・知恵
- 自然エネルギー
- 風景
- 伝統文化

等

新たな事業に取り組もうとする産業の参入

- 食品産業、観光産業、IT産業、化粧品・医薬製造業、エネルギー産業等

地域資源の有効活用

農山漁村の6次産業化

- 生産・加工・流通(販売)の一体化による付加価値の拡大

農林漁業者による加工・販売分野の取組(多角化、複合化等)、農家レストラン、農林水産物や食品の輸出等

- 2次・3次産業による農林漁業への参入

農林漁業と2次・3次産業との連携・融合による地域ビジネスの展開や新たな産業の創出

バイオマス等地域資源を活用した新事業の創出
農商工連携の推進
再生可能エネルギー利用の推進等

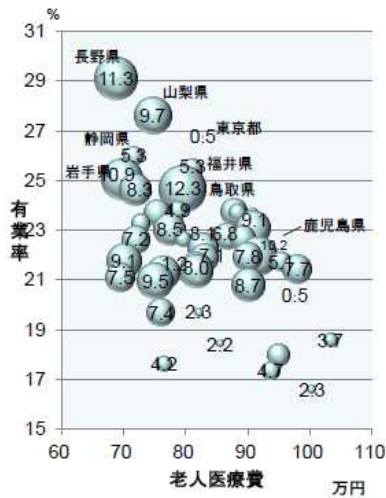
付加価値を創出

地域の再生・活性化

- 農山漁村は、農林水産物をはじめバイオマス、土地、水など様々な地域資源を豊富に有し、今後の経済成長へ向けた希少資源として、わが国の最大の強みのひとつ。
- しかし、**1次産業と2次・3次産業の価値連鎖を結合する仕組みの弱さ**ゆえ、そのポテンシャルが活かされていない。
- 農林漁業者と他産業との新たな連携を構築し、生産・加工・販売・観光等が一体化したアグリビジネスの展開や、先端技術を活用した新産業の育成、再生可能エネルギーの導入等により、**1/バージョンを起こし、農林漁業を成長産業化する。**



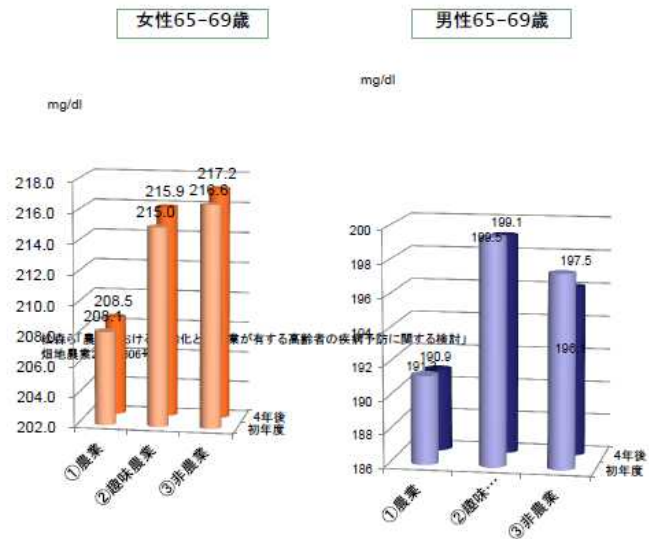
一人当たり老人医療費と有業率



資料：老人医療費は、厚生労働省「平成18年度老人医療事業報告」、有業率と農業者率は、総務省「平成19年度就業構造基本調査」。

注1) 図中の数値と球の大きさは農業者率(%)
 注2) 有業率と農業者率はそれぞれ65歳以上人口に占める農業者数、農業就業者数の割合。

農業者・非農業者の総コレステロール比較



**福祉施設における農業体験活用
(福島県郡山市:就農体験)**

- 中山間地域の農業法人において、障害者福祉施設に通所する障害者の農作業訓練を実施



バス停から農園までは従業員の車に同乗して通勤



朝8時からの朝礼に参加して、その日の作業内容等を確認



農園では、ミョウガ、カイワレダイコン、サンチュなどの施設栽培、パッケージングを実施



農作業訓練を通じて、農業法人と福祉施設双方が、障害者の能力発揮の可能性を認識

**福祉施設における農業体験活用
(岡山県玉野市:農業参入)**

- 障害者福祉施設が農業参入し、耕作放棄地で雑穀栽培等を実施



耕作放棄地を再生



ビニールハウスを手作りで設置



地域の農業者が農作業を指導



兼業農家の施設職員も同行し指導

地域の農業者の協力を得ることにより、障害者就労への理解が進み、福祉施設の農業参入が進展

観光 農山漁村の景観や自然環境、文化等の多面的機能の活用する

- 農林漁業者等による農林漁業及び関連事業の総合化並びに地域の農林水産物の利用の促進に関する基本方針において、農家民宿等のグリーン・ツーリズムのための施設の年間延べ宿泊者数を、平成32年に1050万人にする目標を設定

多面的機能の評価

農業・農村が有する保健休養・やすらぎ機能	23,758億円
森林の保養効果	22,546億円

観光に取り組む経営体数の推移

取組	2005年	2010年
貸農園・体験農園等	4,023	5,840
観光農園	7,579	8,768
農家民宿	1,492	2,006
農家レストラン	826	1,248

6次産業化からの観光事例

【秋田県】ハーブ農園



【岡山県】果樹農園



海外からの観光客:輸出とグリーンツーリズム

日本の食の美味しさの認知

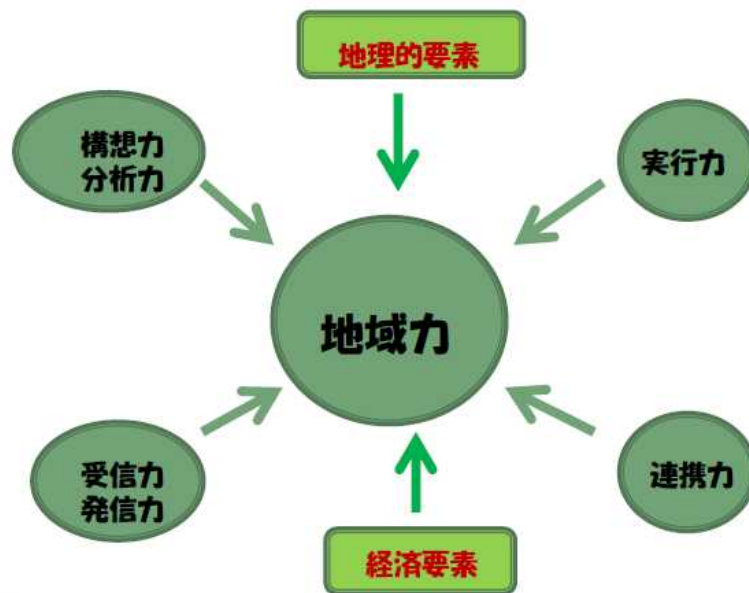
輸出促進



日本の農山漁村の魅力の認知

グリーン・ツーリズムの促進

地域力を構成する人的4要素



29

考えて欲しい！

- ▶ にぎわいは“毎日”必要？
- ▶ ハードに依存？
- ▶ 地域を活かしきるとは？
- ▶ オンリーワンを目指すとは？
- ▶ イノベーションとは？

地域活性化への理解醸成調査
報告書

平成 24 年 3 月

国土交通省 国土政策局 地方振興課

調査・研究 (株) 価値総合研究所
東京都港区三田 3-4-10 電話 : 03-5441-4800
